



平和の架け橋を求めて

比叡山宗教サミット18周年 世界平和祈りの集い

アジア仏教者との対話集会

日時／2005年8月3日（水）～4日（木）

場所／ウェスティン都ホテル京都・比叡山

主催／天台宗・比叡山延暦寺・天台宗国際平和宗教協力協会

後援／財団法人 全日本佛教会



開会式典

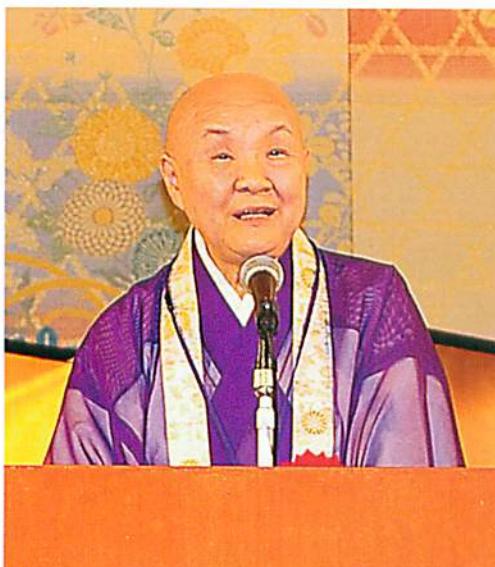
仏教が世界平和実現のために
何ができるか

平和の架け橋を求めて アジア仏教者との対話集会

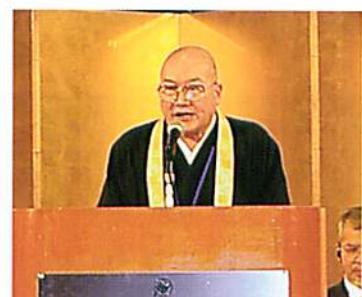
比叡山宗教サミット18周年 世界平和祈りの集い



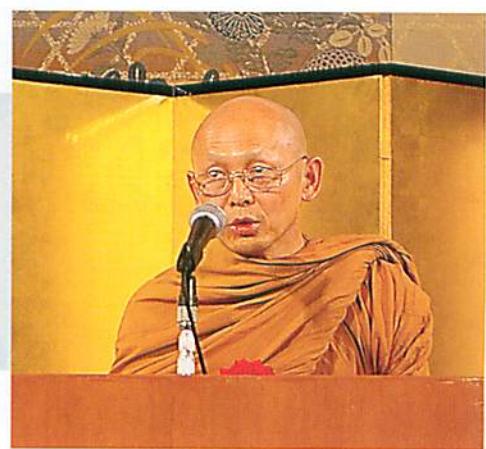
開会式での宗教代表者



瀬戸内寂聴師「無償の奉仕の力」



開会挨拶を行う宗務総長・西郊良光



バイサン・ウォンボラビシット師「佛教者とは平和への媒介者である」

記念講演

◎シンポジウム

対話

紛争和解の為に
仏教者は何ができるのか

平和の架け橋を求めて アジア仏教者との対話集会

比叡山宗教サミット18周年 世界平和祈りの集い



アジア仏教者に加えてキリスト教、イスラム教代表も参加して平和への道を探るシンポジウムが開催された



約400人が参加。熱心にメモをとる



祈る 比叡山にて

平和の架け橋を求めて アジア仏教者との対話集会

比叡山宗教サミット18周年 世界平和祈りの集い



平和祈願文を読み上げる渡邊惠進天台座主猊下



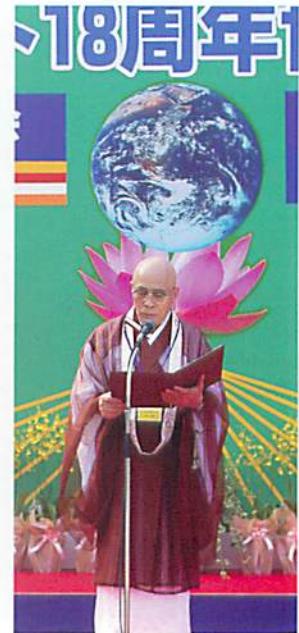
全出席者が心をひとつにして祈る

発信する

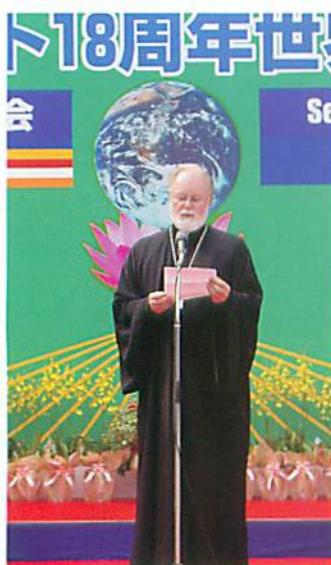
心をひとつに



心をひとつにして祈る



比叡山メッセージを発表する
天台宗国際平和宗教協力協会
顧問・小林隆彰



キリスト教からもイスラム教からも祈りが捧げられた



平和の合い言葉を述べる青少年
代表

平和の架け橋を求めて アジア仏教者との対話集会

比叡山宗教サミット18周年 世界平和祈りの集い

巻頭グラビア

開会式・記念講演・シンポジウム・平和の祈り式典

プロローグ

発刊にあたって 西郊良光・天台宗宗務総長

比叡山メッセージ

開催趣旨

ご挨拶 渡邊惠進・天台座主猊下

一日目(八月三日)

プログラム

開会式典

記念講演「無償の奉仕の力」

瀬戸内寂聴師

記念講演「仏教者とは平和への媒介者である」

パサーン・ウォンボラビシット師

二日目(八月四日)

プログラム

シンポジウム「紛争和平のために仏教者は何ができるのか」

(パネリスト)

ギヤナ・ラタナ師(バングラデシュ) / テップ・ボーン師(カンボジア) /
奈良康明師(日本) / メーダガマ・ナンダワンサ師(スリランカ) /
レオニ・キシコフスキー師(アメリカ) / カマール・ハッサン氏(マレーシア)
(コーディネーター)

杉谷義純師

平和祈願文

渡邊惠進・天台座主猊下

C

O

N

T

E

N

T

S

発刊にあたつて

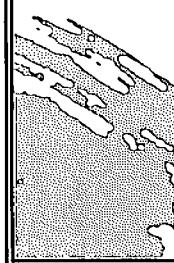
天台宗宗務総長 西郊良光

比叡山宗教サミット十八周年世界平和祈りの集い「平和の架け橋を求めて アジア仏教者との対話集会」は、平成十七年八月三日、四日の二日間にわたり、ウエスティン都ホテルおよび比叡山延暦寺を会場に開催されました。海外からは八カ国の仏教者代表に加えて、二カ国からイスラム、キリスト教の代表者を招き、約八五〇人が参加して世界平和への道を探る集いとなりました。

今回の祈りの集いでは、「仏教が世界平和実現のために何ができるか」という明確なテーマが掲げられて開催されました。二〇〇二年九月十一日の同時多発テロや昨年のロンドン同時多発テロ、中東問題にはイスラムとキリスト教による憎悪の連鎖が指摘されています。

私たちは十五周年世界平和の祈りの集いを、「イスラムとの対話」と題して開催し、世界に蔓延したイスラムへの誤解を払拭すると共に「どのような宗教も平和を求める」というメッセージを発信しました。

今回の集いでは、仏教者は中立的な立場から、紛争当事者に対して平和を働きかけてゆく道が話し合われ、また祈りを共にしました。



比叡山宗教サミット18周年 世界平和祈りの集い
平和の架け橋を求めて アジア仏教者との対話集会

思えば一九八七年に第一回の比叡山宗教サミットが開催され、時間と空間を共にして異なった宗教同士が平和を祈つたとき、我々は世俗世間から奇異な目で見られました。「祈るだけで平和が来るのか」というマスコミからの批判もありました。しかし、それが世界の異なる宗教とその指導者が、平和のために対話し協力するという道筋を拓いてきたのであります。我々は、すぐには結論が出なくとも、この活動をあらゆる場で継続してゆかなくてはなりません。

今回の祈りの集いを通じて、私たちは「仏教者のみが平和の架け橋になるのではなく、すべての宗教がその根本義に立ち返つたとき、平和の架け橋になる」ということを再認識し、更なる対話を続けてゆくことが確認されました。

宗教論争ではなく、他を理解し尊敬することに平和の芽があります。平和のために苦難を共にする宗教者の中には信頼と絆が生れます。その相互理解と尊敬こそが、明日の平和につながると確信いたします。

今も世界では、テロの嵐が吹き荒れ、その報復として大量殺戮が繰り返されています。このような憎悪の連鎖をくい止めるために人々は御仏の説かれた慈悲の精神に学ぶべきであるとは、今回の祈りの集いのシンポジウムで指摘されたことでした。同時に仏教者は他国の悲劇を対岸の火事視してはならないという指摘があつたことも肝に銘じなくてはなりません。法華経に説かれている「すべての人々が幸福にならない限り、個人の幸福はありません」という精神に思いをいたすべきであります。

最後にご協力を賜りました諸先生に深甚の感謝を申し上げ、お手伝いを頂いたすべての人々にお礼申し上げると共に、一日も早く世界平和が訪れんことを神仏にお祈りいたします。

比叡山メッセージ

二〇〇五年八月三日、四日比叡山宗教サミット十八周年を迎えるにあたり、「世界平和祈りの集い」を開催して比叡山上に結集したわれわれは、世界平和を希求する宗教者や地球上のすべての人びとに対して、心からのメッセージをおくりたいとおもう。

今は神のみもとに召されたローマ教皇ヨハネ・パウロⅡ世聖下の呼びかけによつて、一九八六年、イタリアのアッシジに諸宗教の代表者が集い、異なる宗教、宗派の壁を越えて世界平和実現のための祈りと対話を行つた。この開かれた精神に共感し、われわれはその喩みを世界各地に広げるべく、一九八七年、第一回比叡山宗教サミットを開催したのであった。

以来、われわれは毎年比叡山において世界平和を祈り、対話を重ねることによって諸宗教者の相互理解に努めてきた。特に、一九九七年には日本宗教界の総力を結集し、比叡山宗教サミット十周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」を開催し、更に二〇〇二年には、折から世界を震撼させた「同時多発テロ事件」によるイスラームへの誤解を払拭するために「平和への祈りとイスラムとの対話集会」として、比叡山宗教サミット十五周年記念を位置づけた。

しかしながら世界の各地では、今もなお報復と無差別殺戮が繰り返されている。特に中東、イラクにあつては、宗教を大義名分として、憎悪に根ざした武力やテロによる民族虐殺が正当化されようとしている。このような現実の中で、人類救済と平和希求という宗教本来の使命が失われ、ともすれば宗教が政治の渦中に埋没し、利用されているとの批判を受けている。

このたび宗教サミット十八周年記念に際し、われわれは「平和の架け橋を求めて アジア仏教者との対話集会」をテーマに掲げた。世界の諸宗教が基本的には平和を志向しながらも、現実はその理念から乖離し、宗派間内部

比叡山宗教サミット18周年 世界平和祈りの集い 平和の架け橋を求めて アジア仏教者との対話集会

の抗争はもとより、宗教間の紛争が目立ち、「紛争の根に宗教がある」とさえ指摘されがちな現象を生んだことは否定できない。とは言え、暴力を抑制する宗教が暴力を助長する要因であつては決してならない。

このような情勢の中で、特にキリスト教とイスラム教の対立が心配されている。この時われわれは、広くアジアの諸地域の土壤に根づいた仏教が「世界平和実現のために何ができるか」(開催趣旨)をテーマに、アジア各地域の仏教者代表を結集し、仏教者が自らに問いかけると共に、さらに諸宗教の人々と対話することにより十八周年記念を意義あらしめるべく平和の祈り集会を開催した次第である。

仏教の開祖ゴータマ・ブッダは、すべての存在は相互依存している、という縁起の法を示した。この仏教がアジアの諸地域において、それぞれ異なる民族、風習、文化と接触しながら、それらに溶け込みそれぞれ独自の文化を形成した。この相互依存の理念は、人類の共存と地球環境との共生に資するものである。

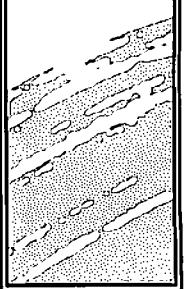
さらにブッダは命の尊さを訴え、無諍と非暴力こそ共存の倫理と説かれた。その実践には、無量の慈しみと哀れみの心と、幸せと共に喜び差別の無い平等心で他者と接することを教えている。

「このような仏教の歩みと考え方」は、ヨハネ・パウロⅡ世聖下が宗教サミット十周年記念に寄せられた「自己」の宗教への頑なな信仰や執着のために生まれる不寛容と、他の宗教への差別をなくするために、世界の諸宗教の協力と対話が望まれる」というメッセージと通じ、又イスラム教の最高権威アズハルのタンタウイ総長がやはり宗教サミット十周年に寄せられたメッセージで、イスラームは暴力やテロを受け入れず、そして他宗教の人々と平穏に生活することを呼びかけた言葉にも通ずる。われわれはこれらの精神を継承し、深い反省と責任を自覚し、一人ひとりの心に平和の砦を築くことを働きかけ、世界を掩っているテロや核兵器の脅威に、共に対処してゆかなければならぬ。

それ故われわれは仏教のみが平和の架け橋となるのではなく、すべての宗教がその根本義に立ち返ったとき、平和の架け橋であることを再認識し、更なる対話を拡げていくものである。

そしてわれわれの祈りと対話の営みが、人類融和をめざすすべての人びとの連帯と協力を必要とするこの時代に、神仏の加護のもと生かされることを切に希つてやまない。

開催趣旨



人類の歴史の中で「戦争と大量殺戮の時代」といわれている二十世紀は、第一次世界大戦の終結によって、平和が訪れる事を期待されました。しかし、その期待は裏切られ、訪れたものは東西両陣営による冷戦の時代でありました。それは同時に一触即発の核戦争による人類滅亡の恐怖をもたらすものでもありました。ところが、二十世紀末にソ連の体制崩壊が起こり、冷戦は終結し、人々は「核戦争の危機は去った」と平和な時代の到来を期待したのです。

にもかかわらず、期待をもつて迎えられた新世紀は、世界各地に民族紛争が多発し、さらにはテロリズムの脅威が吹き荒れ、「憎悪と報復の時代」として幕を開けました。ボスニアや中東紛争に代表される民族憎悪は、多くの犠牲者を生み、アフガンやイラク戦争は再び大量殺戮の時代へと歴史の針を戻しつつあるように見えます。

私たちは、一九八七年八月「比叡山宗教サミット」を開催いたしました。

世界の諸宗教指導者が教義の違いを超えて比叡山に集い、世界平和の実現を、それぞれの神仏に祈念いたしました。以来十八年にわたって「異なる民族や宗教者同士が対話と祈りを積み重ね統

比叡山宗教サミット18周年 世界平和祈りの集い
平和の架け橋を求めて アジア仏教者との対話集会

ける」ことが、平和の基となる」との確固たる信念のもとに、活動し、連帯を深め、真摯な祈りを捧げ続けてまいりました。

その歩みは、ささやかではあっても、「どの宗教も平和を希求している」という真理を体現し「紛争の根に宗教がある」という誤解を払拭するべく、お互いが理解と協力を努めてまいりました。

今回は比叡山宗教サミット十八周年を迎えるに当たり『平和の架け橋を求めて アジア仏教者の対話集会』と共に世界の諸宗教代表者による『世界平和祈りの集い』を八月三日、四日開催致します。キリスト教とイスラム教の対立を世界の人々が危惧している中で、「仏教が、平和の架け橋となるべきだ」という声を受け、仏教が世界平和実現のために何ができるかを、各国の仏教者はもとより諸宗教者と話し合い、更に千二百年の間平和の灯をともし、祈り続けてきた比叡山上で諸宗教代表者による平和の祈りを捧げるものであります。

そして私たちの祈りと対話への嘗みが人類の融和の時代へと歴史の針を確実に進める一助となることを心から願うものであります。

多様性を認め共存を



天台座主 渡邊 恵進

今、世界は相変わらず「正義」や「大義」を名目とするぶつかり合いによつて軋んでおります。

まず相手を倒し、自_己の正当性を確立することが平和への道だとする考え方の果てには、決して眞の平和は訪れないことを知るべきであります。そのためには、攻撃ではなく、お互いの信頼と尊敬を築く努力をすべきであります。

一九八七年に発表された、第一回比叡山宗教サミットの比叡山メッセージで「平和のために祈ることは、平和のために働くこと、そして平和のために苦しむことですらある」と私たちは宣言しました。これは、平和を求める宗教者ばかりではなく、今戦場にある人々や、戦争を指導している為政者に向けられたメッセージであります。

平和の実現とは、お互いの多様性を認め共存することです。そのことは、決して平坦ではなく、対立する民族どうしはもちろん、今回、その橋渡しをしてようとする私たち自身が、時に自らの骨を削るような苦しみにさらされることでしょう。

しかし、価値観の違う者どうしの相互の信頼と尊敬は、共に困難な道を歩むときに生れます。

宗教者として、最新兵器やテロリズムで殺戮が続く紛争地域の人々に、お互いの偏見と憎悪を捨て、お互いを認め合うことの出来るよう、働きかけねばなりません。

私たちアジアの佛教者は、世界平和の架け橋となるべく、世界中の平和を求める人々と共に歩み続けましょう。

今回のサミットに、神、仏のご加護がありますように、心より祈念いたします。

比叡山宗教サミット18周年 世界平和祈りの集い
平和の架け橋を求めて
アジア仏教者との対話集会

プログラム

1
第1日

2005年8月3日(水)

13:30	受付(於:ウェスティン都ホテル京都)
14:30	開場
15:00	<p>開会式典</p> <p>◎開会の辞 天台宗宗務総長 西郊良光</p> <p>◎海外招請者紹介 天台宗参務総務部長 工藤秀和</p> <p>ギャナ・ラタナ師</p> <p>テップ・ボーン師</p> <p>釋一誠法師</p> <p>釋允觀法師</p> <p>釋淨心法師</p> <p>サダナンダ師</p> <p>金法長僧任</p> <p>田雲徳僧任</p> <p>カマール・ハッサン氏</p> <p>メーダガマ・ナンダワンサ師</p> <p>バン・ワナメティー氏</p> <p>バイサー・ウォンボラビシット師</p> <p>レオニド・キシコフスキー師</p> <p>◎祝辞</p> <p>小島敏雄氏 文部科学副大臣</p> <p>里見達人師 全日本仏教会理事長</p> <p>バン・ワナメティー氏 世界佛教徒連盟会長</p>
	休憩
15:40	<p>◎記念講演</p> <p>発言者紹介 天台宗参務総務部長 工藤秀和</p> <p>発言者 瀬戸内寂聴師 演題「無償の奉仕の力」</p> <p>発言者 バイサー・ウォンボラビシット師(国民和解委員会委員) 演題「佛教者とは平和への媒介者である」</p>
17:30	<p>閉会</p> <p>◎閉会の辞 天台宗参務総務部長 工藤秀和</p>

記念講演 無償の奉仕の力

瀬戸内寂聴師

この宗教サミットが十八年目を迎えて、夢のような気がします。初めてこのサミットが比叡山で行われましたとき、私も隅っこの方で参加させていただき、その厳かな祈りをずっと拝見させていただいておりました。

その時取材にきておりました新聞記者たちが「祈つて平和が得られるものかね」と嘲っているのを耳にしました。「祈つて平和が来るのならそんな結構なことはない」と馬鹿にした口調で話しておりました。私は、まだ出家してあまり時が経つておりませんでしたから、その言葉が身に刺さりました。でも、祈るしかこの混乱の世の中を救うものは何もない、その時考えておりました。祈りが通じるか通じないか、それは分りません。これだけ様々な宗教が世界中にあって、それぞれの指導者は自分の宗教を信じて一生懸命に修行し、祈つております。しかし、何時も地球のどこかで戦争が行われていて、全く戦渦がなかつたときというのは数えきほどもございません。

■ 戦後の混乱のなかで

日本が起こしました十八年戦争も終わり、終戦後私は北京におきました。結婚して夫が中国古代音楽史というものを探求

しており、留学生のまま北京に残つて学者として研究を続けておりました。そこへ私は嫁ぎ、北京で一女をもうけました。そうしましたら、夫は三十歳を過ぎておりましたが戦争にとられてしまい、赤ん坊を抱えて私は非常に心細い思いをいたしました。

昭和二十年の終戦を迎えるまでに、日本人がいかに中国で横暴を極め、中国人の人々に酷いことをしたということをこの目で見ていました。それで終戦になつたとき、私は殺されて当たり前だと思いました。日本はあらゆる文化を中国と朝鮮から頃いています。建築、陶器、織物あらゆる文化を教えてもらい、育ててきました。大恩ある国に、日本は間違つた戦争を仕掛けたのであります。あの戦争で、日本は二千万人のアジアの人々に迷惑をかけました。

私たち親子は、中国人の人と喧嘩をしておりませんし、仲良くして、夫は中国の大学で講師をしておりましたから、学生達が遊びに来て和やかなつき合いをしておりました。しかし、敗戦となりますと、今度は日本は中国から何をされても仕方のない立場となりました。主人はどうに連れていかれたかわからない状態で、私は絶対殺される、どうやってこの赤ん坊を日本に連れて帰るか非常に悩みました。考えても何も出ません。一二三日そうい

う状態でいましたが、家の前は小さな路地になつていて、門を開けますと隣の家の壁がありました。その壁に真っ赤な紙の中に國語で「恩に報いるに徳をもつてす」と書かれてあり、一杯貼つてありました。それを見たとき全身に震えがきました。私たちは中国に殺されてもいいと思っているのに、その私達に徳をもつて接しないと政府が命令している。こういう国に戦争を仕掛け、負けるのは当然だと思いました。本当に恥ずかしくて、このまま帰れなくとも運命だから仕方ないなと思いました。

その経験からして、中国人は負けた我々に対して本当に良くしてくれました。ある時、雇っていたアマという七十歳ぐらいの人が十六歳の少女をつれてきましたが、雇うだけのお金が出せないのです。でもその人は、困ったときに助けるのが友達だ、長い間友達でいたのに困つてのをどうして見捨てられようかと言いました。中国人は友人を大事にするのです。吃驚しました。米や野菜を運んでくれ、町の人々も親切でした。個人と個人は心が通じ合って仲良くやってゆけると思いました。

夫は自分は中国が好きだから、負けて日本に帰つて勉強し直すより、中国人になって中国に骨を埋めたいと言い出しました。

あなたがそうしたいのなら、私もいわよどいうことで、二人で中國に残つて中国人にしてもらうて骨を埋めようと決心しました。

しかし、政府の方針としてはそういうわけにはいかないと、日本人は港から船に乗せられて引き揚げといつて、日本に全部返されるわけです。集結所に寄せられるのですが、私たちは非合法に町の中に隠れました。そうすると同じような日本人が沢山いて、そこに集まつてきました。お金を出し合つて、食事を作つて食べてなんとか凌ごうということになりました。私達のように中

国人になりたいという学者が相当おりました。学者のグループと、中国で非常にお金を儲けた人たちもいました。土地成金で、それを置いて帰るのが惜しいという人々です。帰る用意さえできな貧しい人々もいました。その三種類の日本人が約一年間、隠れ家で非法的な生活をしたのです。

ある朝見つけられて、トラックに乗せられ、港に運ばれましたので、支度も何もしていなかつたのです。着の身着のままで引き揚げてきました。故郷の四国徳島の町は一晩で焼かれていきました。母と祖父は折り重なつて防空壕で殺されました。そうして人生をやり直すわけですが、その時に私は百八十度考え方の転換をしました。それまでは、先生や偉い人に教えられたことを忠実に素直に守つてきました。国がこの戦いは聖戦だ、アジアを幸せにするための戦いだ、ということを頭から鵜呑みにして信じていました。実際敗戦になつて命からがら引き揚げて来たときに、私はこれからは人の言うことなんか聞かない、自分で考え自分の手で触つて、これは本當だというだけを信じて生きていこうと考えが変りました。離婚し、家を飛び出し、小説を書き、出家しました。そうして今日があります。

■宗教と人の幸せに尽くすこと

私は中国には親愛感を持つていました。小説家になつて、初めて開放後の中国へ文化使節として行きました。北京で中国仏教協会の趙樸初会長に会い、歓迎されたのですが、「私は戦争中に北京で暮らし、横暴な日本人を見てきた。私も日本人だから、招待されて来るということは本当は恥ずかしいことだ、遠慮しなくてはいけない、忸怩としている」と言いますと、趙樸初さんが、

「そんなことはない。一人の作家です。私たち過去は問いません。中国人を虐めたり銃を持ったわけではない。ただ運命に翻弄されて敗戦を迎えた。堂々としていなさい」と言つて下さり、涙が溢れました。

日本が中国だけではなく、アジア全体に与えた傷跡というものは消すことができません。

今の若い人は戦争を知りません。我々にはその残酷さを語り伝える義務があります。被害者は子孫の代まで伝えるのです。でも加害者は触れない。

今も世界で戦争が始まると、それに協力しようとする動きがあります。

仏教では、戒律の第一番に不殺生「殺すなれ」と称えています。人間だけではなく、あらゆる生き物を殺してはならない。また「殺させるなれ」も教えられています。人が殺そうとするのも止めなくてはならないのです。これが仏教の戒律です。戦争は人が人を殺すことです。その国の近代化とか貧困を救うとか、つても、為政者は戦争をする場合、さまざまな美辞麗句で飾り立てるのです。戦争は人殺しです。絶対にしてはなりません。特に宗教に帰依したものは、仏さまの教えを守つて、してはならないのです。

私は、あらゆる戦争が起つたとき率先して反対しています。国が賛成しているのに反対するのは、非常に勇気のいることです。筆で書いたり、新聞広告を出すこともあります。

湾岸戦争終結時には、編集者一人とバグダッドに参りました。

戦後のイラクに届けるために募金を募り、私も募金して出発したのです。それでヨルダンの首都アンマンに到着して、現地で薬を

買いました。三トントラックに一台分にもなりました。現地には赤十字にあたる「赤新月社」という組織があります。バグダッドまでの運搬を赤新月社に頼みますと「二日で着く」といいますので、私たちは先にバグダッドを目指しました。

バグダッドで私たちは薬のリストを見せますと、医師たちは「これが欲しかった」「これで患者が治る」と喜び、リストの奪い合いになつたのです。「本当に有り難い」と感謝されました。しかし、いくら待つてもアンマンから薬が到着しないのです。四日目になつても来ない。明日にはどうしても、私たちは帰国しなくてはならなくなりました。

バグダッドを離れる前夜に、私はドクターラたちに「薬が来た」とにして、受け取りにサインして欲しい」と言いました。寄付してくれた方々に説明する必要があつたからです。ドクターは快諾され、受け取つてもいらないのに次々とサインしてくれました。私の心を信用してくれたのだ、ととても感動をいたしました。

日本人は目に見えるものしか信じません。目に見えないものは人間の心、彼等は目に見えない人の心を信ずるのです。これが人間です。神仏の畏れを忘れて、日本人は堕落してしまつたのです。犠牲奉仕がキリスト教の根本精神です。また天台宗は「忘己利他」と宗祖伝教大師最澄上人がいつております。自分の幸せをおいて他の人が幸せになるよう努める。仏教者として一番大事なことだと教えているのです。そのことをヨハネ・パウロⅡ世が、比叡山宗教サミットのときに山田恵諦座主におっしゃいました。私は何度も聞きました。

あらゆる宗教は人の幸せのために尽くすことです。祈りは自分のために祈つては効かない。仏に受け入れられる祈りは、人の

ために祈る祈りです。三十二年の出家生活で何度も実際に経験しました。天台寺という荒れ果てた寺を復興しろという命令で二十年通いました。いかに復興しても無報酬で通い続けたのです。自分のためなく、人の役に立つことが仏の道ではあります。ありませんか。

今ここに世界中から来られた宗教指導者の皆さまも、世界の平和を祈ることは何の得にもならない。尊い心で支えられた。祈つて平和がくるのかという人がいるでしょう。私たちの祈

りは今すぐ聞き届けられなくても、将来叶えられて、世界に平和が訪れるのではないか。人間は、このまま戦争ばかり続ける、それほどの馬鹿じやないと思います。どこかで誰かが自覺めて平和の旗を振つてくれ、怨みに報いるに恩と徳を持つて、相手を許され、仲良く暮らす淨土の姿が現れると期待しています。希望を失わず、信じるものを感じて、永遠の平和を目指してゆきたいと思います。

記念講演 佛教者とは平和への 媒介者である

バイサーン・
ウォンボラビシット師

(国民和解委員会委員)

全ての人間が平和を望んでいるにもかかわらず、戦争のない時代は希である。戦争の後にやつてくる短期間の平和は意味がない。第一次世界大戦の頃は、「全ての戦争を止める戦争」が、世界永久平和をもたらすと強く宣信されていた。しかしその二十一

を期待する声が再度聞かれたが、それもユーゴスラビアからの独立戦争によってかき消された。その後は新しい形の戦争、国際テロリズムに対しての本格的なアンチ・テロリズム戦争がアフガニスタン、イラクにて行われたのである。

数年後には直ぐに第二次世界大戦が勃発した。戦争終了時には、国際連合が誕生して、六十年の平和をもたらした。けれども、冷戦が始まる前に朝鮮半島、ベトナム、アフガニスタンでは戦争が勃発している。ソビエト連邦崩壊後、すなわち冷戦後には、平和

一一世紀は、おびただしい死傷者の時代である。一九〇〇年から一九八九年の期間には、八十六万人もの命が戦争によつて奪われた。第二次世界大戦以後の三十五年間に、二十二万人が命が奪われた。一方では自國政府によって四十八万人の命が

奪われるという悲劇をもたらした(スター・リン、毛沢東、ポル・ボト派を含む)。さらに危惧すべき事に、二十世紀は世界中で、ジェノサイドが行われた。ユダヤ人の大量虐殺やルワンダに於ける大量虐殺は、悲劇の数例でしかない。

危惧をされている二十一世紀の戦争は、パターンが変化してきている。以前は国同士の争いであったのが、今では人間と人間との争いとなつた。二十世紀は死傷者の九十%は兵士だったにもかかわらず、二十一世紀では死傷者の九十%は民間人である。

この新しい形の戦争は、ルワンダ、ソマリア、ボスニア、クロアチア、チエセン、スリランカ、カシミール、ミャンマー、インドネシアなどで起つており、民族、宗教そして、暴力の拡大などが原因である。

民族、宗教紛争は、政治だけでなく、異文化への憎悪の温床を世界中へまき散らす。この悪影響は、全ての国々に伝えられ、教育の有無、財の有無は関係なく人々に深く浸透するのである。

憎悪の文化は國の人々を「彼ら」と「私たち」に二分するだけではなく、敵対する者への惡意、自己中心的な考え方を膨らませる。彼らを下品、劣等であると見なし、邪悪で、人間以下であると思ふようになるのである。異文化の人々を「他人」と描くように、相手への敵意を結集するためにナショナリズムが利用される。その結果、憎しみを増大させ、互いに暴力を使用し、抜け出しが困難な紛争の渦へと吸い込まれていくのである。

■平和の文化

憎悪の対象の文化が、人々の心の根底まで広がつてしまえば、どのような平和も求めることはできない。平和への媒介者となるためには、仏教徒が憎悪の対象となつた誤解を正さなければ

ならない。全ての仏教教宗派は、人種、民族、宗教、言語そしてイデオロギーの相違を大事にしている。仏教の世界では、全ての人間は世界に共存する友達であり、輪廻転生の仲間であり、老化していく仲間であり、死する仲間である。そればかりか、前世に於いては、兄弟姉妹だったかもしれないと見るからだ(生きとし生ける者はすべて仲間であるのだから)。

慈悲の視点から見た場合、智慧は仏教の突出した長所であり、眞実を得るポイントである。眞実は憎悪の毒を解毒する。相手に対して憎しみや反感をかりた子るような人は、人間性を失つてゐるか、相手の悪い側面を強調しているだけである。憎しみはまた、自分との違いを選び出しているようだが、実際には人間は相違点よりも類似点のほうが遙かに多い。

智慧はまた、人種、宗教、言語、肌の色にかかわりなく、全ての人間は同一であるということを悟らせ、敵対をしている相手も、我々と共に同じ人間界に共存しているということを悟らせる。

全世界の仏教徒は、智慧と慈悲を根本として、平和な文化を立ち上げるべきである。そしてその平和実現への試みは、個人的、または近隣やコミュニティーレベルで行うべきではなく、国規模や国際的なレベルにて行うべきである。古の時代に於いては、平和実現を個人的、近隣地域で行うことで十分だった。少数外部からの脅威であれば、近隣地域だけでの平和は保つことが可能だからである。

しかし現在のグローバル化時代において仏教徒は、その時代に適するように観点を拡げ、平和活動をも拡大していくべきである。世界平和構築のためのコミュニティーは、国際レベルの平和活動にほかならない。

平和を構築するために、全ての仏教徒は以下のことを積極的に行つていくべきである。

1. 仏教徒とすべての人々との信頼と協力の心を育成する
憎しみは、人々を分断する。憎しみではなく信頼と協力によって力を合わせるべきである。平和文化の構築にあたっての第一ステップは、人間同士の信頼と協力を育成することである。過去から現在において、宗教が憎しみを助長し、暴力や戦争に導く重要な役目を担っていたことは無視はできない。しかしながら、宗教は「慈悲心」、「寛容性」、そして「相手を許す心」という平和構築のために必要不可欠な要素を育てる非常に高い潜在能力を持つている。世界平和はすべての人々が協調し、憎しみを「愛」に、そして敵意を「許す心」に替えることで達成できる。

今、仏教徒ができる事は、国際的レベルで、他宗教との対話を行うことである。その対話によって親交と信頼が得られる。全ての宗教は、各々の信仰、祈り、個人やそれ以上の平和活動を基盤として、互いを理解する、すなわち相互理解をすべきである。互いの信頼関係が平和活動を促進させるのである（例：平和教育、反戦運動など）。

宗教間の團結のためには、異なる民族、人種、言語の信頼と協調が必要不可欠である。民族紛争が勃発している数々の国々では、コミュニケーションの破綻から、疑念と憎しみが紛争を引き起す。疑念や憎しみを減らすためには、対話をし、親密な関係を築く必要がある。対話によって、両者の恐怖感や疑念を、率直かつ適切に指摘できるからである。その結果、両者は自分の相手がメディアから伝えられたイメージとは異なることに気づくのである。このような活動を仏教徒は他国でも行うべきである。

これを民族、宗教問題を起因として勃発した紛争地域の宗教と協力して行うのであれば、様々な国々の異なる民族、宗教人種のあいだに親密な関係を作ることができ、疑念と暴力とを減少させられることが証明されるであろう。

2. 平和教育の奨励

平和教育は、大変重要である。仏教徒は、学校、大学、コミュニティーでも重要な役割を果たすべきである。仏教徒の平和教育は信頼、寛容性、慈悲心、許す心といった、平和的な共存に基づいている。人間は、全ての生きとし生けるものに対して、宗教、言語、人種、そしてイデオロギーの尊厳と権利を尊重なくてはならない。非暴力と相互理解は、暴力の連鎖をくい止めるであろう。

また平和的闘争による問題解決方法も盛り込むべきである。我々は紛争を平和的に、そして上手にこれを取り扱うべく方法を学ばなければならない。これらの方法は、子供の頃より教育することが可能である。アメリカ合衆国では、小中学校や高等学校で、日常生活の喧嘩や論争などを平和的に解決する方法を学んでいる。またボランティア達は、生徒間に喧嘩などが起つた時に備えて、その仲裁ができるよう教育されている。

3. 平和的メディアの影響

メディアは、人々の動向に大きな影響を及ぼす。現在のマスメディアは、気づかぬうちに紛争へと続く攻撃的な心理状態へと誘い、人々を支配し、憎しみと疑念を生むように煽動している。それに対して仏教徒は、平和的姿勢と反暴力を訴えて行くべきである。平和的なメディアは、異なる民族と暮らす多數派に対しては決定的な役割を果たすだろう。相手の生活、習慣、信仰、そして望みをメディアが解りやすく放送をするならば、我々は其

通点の多さを学ぶことができるのである。

平和的メディアの大きな役割は、平和の促進のニュースを広めることである。メディアがセンセーショナルなニュース、暴力犯罪、そして紛争などを売るようになってからは、そばかりが強調されるようになり、協力や平和は無視されがちになってしまった。テレビやラジオ、新聞などは平和専用のカテゴリーを作成すべきである。

たとえ娯楽番組であっても、平和や平和を育む姿勢をメッセージとして込めるることは可能である。競技やバイオレンス番組、また映画やゲーム番組においても協力、寛容性、許し、慈悲心そして反暴力ということを表現することは可能である。

■暴力状態の停止

平和の文化を育むためには、暴力の排除を行わなければならない。暴力は、貧困、収入不足、経済不均衡、基本的人権の侵害、そして不当行為といった社会情勢を原因としている。このような社会経済的な圧力に対し、人々は、宗教、ナショナリズム、部族関係をイデオロギーとして暴力に訴える傾向がある。民族的な視点から見ると、紛争は権力の不平等による資源不足と経済的なフランストレーリングから生じている。ルワンダにおけるジェンサイドは、地域の物質不足から、ライバル同士の部族関係が悪化したことが始まりだ。限られた資源と人口増加により、暴力紛争が多発している。殺戮は同じ部族の村でさえ例外ではない。殆どの犠牲者はその土地の所有者である。

暴力を排除するためには、以下の方法を薦めたい。

1. 貧困の減少

独立戦争の多くは低所得国で発生し、原因是、貧困、低所得、そして低経済成長である。貧困率が減少するなら、戦争や暴力を予防することができる。その方法は、職業訓練、健康維持の促進、資源保護、低金利信用貸などである。見逃してはならない要素に、公共資源活用に人々が参加できることがある。人間の生計は、公共資源へいかに便利にアクセスができるかにかかっている。困窮の原因と悪化は、木材、水、土地などの地域の資源のコントロールができないことである。資源のコントロールが平等に行われるようにして貧困を減少させるべきである。

仏教徒は、地域開発の制限ではなく、それらが皆に平等に行き渡るようするべきである。

2. 構造的暴力の排除

貧困の根は必ずしも不平等な社会だけに存在するのではなく、政治的構造、そして経済構造に存在する。これらの構造によって、人々は資源のコントロールを失うのである。それは、経済、教育、そして文化などを失うことである。不当な権力の集中は、例えば、農業増大の産業発展を生み出す一方で、低所得の人々の耕作地を失わせる。

このような政策と構造は、人々を貧困、苦しみ、疫病、栄養失调、そして早死へと追いやる。これが構造的な暴力である。構造的暴力の排除は、仏教徒の平和活動において必要不可欠だ。我々は、社会、経済、そして政治構造が、平等な力関係による人間の生活環境と尊厳を得られるように努力し、サポートしていくべきである。

構造的暴力を排除すれば、利害関係は大きな影響を受ける事になり、利を失った者達の激しい報復は明らかである。我々は、

反暴力を掲げることだけではなく、また彼等に対する行動が反暴力になるようすにすべきである。仏教徒が必要とすることは、非暴力的行動を学ぶことと、そのテクニックを発展させることである。非暴力のバイオニアであるガンディーやマーティン・ルーサーキング・ジュニアなどの成功例からは多数学ぶことが可能である。

3. 戦争停止と平和の力の促進

平和活動をするにあたり、現在進行中の戦争の制止と、未来の戦争の予防が必要である。イラクへ駐留するアメリカ軍に対する反戦運動は、世界中の平和行動が共に協力した例である。こうした活動は、将来、仏教徒が他宗教派と協力をしていく上で重要な活動なのである。抗議運動や反戦運動の視点から鑑みるに、仏教徒は、戦争と暴力の「証人」となるように今まで以上に注意を払うべきであると思われる。「証人」は紛争をしている人々を、世界から監視され続けているということに気づかせるのである。武装勢力に対しては暴力を使うことを思いとどまらせ、紛争地域で非暴力活動をしている人々に対してはモラルサポートすることになる。非暴力活動者達へのモラルサポートは、平和の回復を助長するであろう。数々の国の経験で「証人」が暴力のエスカレートを防ぐことが証明されており、しかも各地の非暴力活動家達を攻撃から守ることが可能なのである。

■ 平和の構築

右記に挙げた提案は、多くの仏教徒にとって不自然に聞こえるかもしれない。しかし仏教の教義の「全ての者の幸福の為に皆で努力をする」という事から考えれば可能である。しかしながら、これらは仏教徒が以下のように深く理解し、変わった場合にお

いて可能なのである。

1. 更なる社会的従事

仏教徒は、社会的な問題を無視し、個人の解脱のために修業をする 것을を目指す。しかしながら、仏陀によれば、個人的悟りは安穏で健康的な環境から得られることがない。社会への従事は、個人変化の要因として、仏陀により強調されている。社会発展及び人々の苦しみを緩和する事は、仏陀の教えである。しかし、社会への従事は、伝統的な仏教徒の修業と教育からは欠けているのである。社会従事の仏陀の教えを復活させることが必要である。それを堅実で理論的なものとして、仏教徒はより社会へ従事することになるであろう。

2. 慈悲、非暴力そして寛容

平和運動は、慈悲、非暴力、寛容そして許しという方針で活動をしている。これらは仏教が、心に持ち続けているものである。親愛の心と寛大な心により侵略者に打ち勝つ数々の話が三蔵には存在している。そのような徳を得るために、仏教徒は自分の考えだけに依存すべきではないであろう。一つの考えに執着するとによって紛争や暴力が発生する。宗教に執着した視点もが宗派間の紛争や暴力につながる。

人種差別、民族主義などが、世界の暴力の原因になっているのである。仏教を含む数々の宗教が愛国主義者や人種差別主義らに悪用されたり、操られたりして暴力の増加を助長した事件が起つていている。

宗教が憎しみと暴力の原因でなくなるのであれば、戦争を著しく減少させることができ。仏教徒は、平和活動と和解によって世界平和におおいに貢献することが可能である。仏教徒は

他宗教派に対し、寛容の心から異なった視点を学ぶべきである。

3. 仏教の心に気づく

慈悲の心だけでなく、深い悟りとありのままの自己の発見のためにも、仏教の瞑想を復活させることは大変重要である。慈悲と智慧を高めることにより、国内の平和は達成することができる。しかし、瞑想は、現実逃避や社会義務放棄を目的としてはならない。慈悲心と公平心を持つた社会活動のためにそれは確固たる土台の上に成り立つべきものである。世界平和活動は、国内平和によって作り上げられていくものである。

4. 二元性視点の世界

人々は、世界を二元性視点、例えば、善と悪、幸福と苦しみ、成功と失敗というように物事を並列対比して理解しようと/or>する。これらの要素は他と対比をするものである。これらの区別は、優劣を競うものである。このような世界観から見てみると人々は「彼ら」と「私たち」の二つに分裂してしまうのである。

世界は二元性ではなく、全ての存在するものは相関しているということに気づかせるのが仏教徒本来の世界観である。この観点から考えてみると、誰もが絶対善ではなく、誰もが絶対悪でもないことに気づくのである。心中に善と悪を併せ持つ我々は、良い人々(私たち)と悪い人々(彼ら)の二つの間にラインを引くことはできないのである。善と悪を分かつラインは、我々の心を分かつラインである。自分自身の悪いところに注意し、他の人々の長所を認めるよう注意していくれば、人々はうぬぼれやひとりよがりに簡単には陥らないのである。

世界中の「私たち」に対する「彼ら」の関係のベースとなっているものは、憎しみの対象になる文化である。「彼ら」対「私たち」の関係から見ると、我々と離れている人々は、自動的に私たちの敵とみなされるであろう。白と黒の世界観は容易に不和と反感を増幅させる。憎しみの文化を克服するためには、二元性の世界観に一元性の世界観がとて変わらなければならぬ。それは、人間は同じであること、他と関係することにより自己の存在があることに気づくことである。

■一つの家族へ

アジアの仏教徒が共に会して、平和の架け橋を求めるということは希なことである。対話や協議をするよりも、無からの協力によるファーストステップを踏むほうが早いと信じられているからだ。実際は誠実な対話により、信頼と團結が強まるのである。まさに、仏陀の「対話は我々を親類のようにしてくれる」という言葉の通りである。それゆえこのサミットに集つた我々は兄弟、姉妹であり、同じ家族ということになる。

我々は、たとえ異なる状況、場所からの参加であつても、信頼と協力、そして世界平和構築の使命を共にしている。このサミットが、我々の声である、全ての民族と宗教を憎しみや敵意から解き放ち、そして「彼ら」が、本当の家族である「私達」と共になることを促進するであろう。

**比叡山宗教サミット18周年 世界平和祈りの集い
平和の架け橋を求めて
アジア仏教者との対話集会**

プログラム

第2日

2005年8月4日(木)

9:00	<p>シンポジウム(於: ウエスティン都ホテル京都)</p> <p>◎開会の辞 天台宗参務教学部長 小堀光賀 テーマ 紛争和解の為に仏教者は何ができるのか ・ギャナ・ラタナ師 愛知学院大学教授(仏教 バングラデシュ) ・テップ・ボーン師 カンボジア仏教会会長(仏教 カンボジア) ・奈良康明師 駒澤大学総長(仏教 日本) ・メーダガマ・ナンダワンサ師 ルフナマタラ大学シニア講師(仏教 スリランカ) ・レオニド・キシコフスキー師 世界宗教者平和会議国際委員会実務副議長(キリスト教 アメリカ) ・カマール・ハッサン氏 マレーシア国際イスラーム大学学長(イスラム マレーシア)</p> <p>◎コーディネーター 杉谷義純 天台宗国際平和宗教協力協会顧問</p> <p>◎開会の辞 天台宗参務教学部長 小堀光賀</p>
12:00	昼食・休憩
13:00	比叡山へ移動
14:45	<p>平和の祈り式典(於: 比叡山延暦寺)</p> <p>◎開会の辞 天台宗宗務総長 西郊良光</p> <p>◎祈りの言葉 サダナンダ師 全印度僧伽協会管長(仏教 インド) 釋一誠法師 中国佛教協会会长(仏教 中国) 釋淨心法師 世界佛教華僧会会长(仏教 中国台湾) 金法長僧任 韓国佛教宗団協議会会长(仏教 韓国) カマール・ハッサン氏 マレーシア国際イスラーム大学学長 (イスラム教 マレーシア) レオニド・キシコフスキー師 世界宗教者平和会議国際委員会実務副議長 (キリスト教 アメリカ)</p> <p>◎平和祈願文 天台座主 渡邊惠進</p>
15:30	<p>◎平和の鐘</p> <p>◎平和の黙祷</p> <p>◎ユニセフ募金寄託式</p> <p>◎平和の合い言葉</p> <p>◎比叡山メッセージ発表 小林隆彰 天台宗国際平和宗教者協力協会顧問</p> <p>◎閉会の辞 比叡山延暦寺執行 森定慈芳</p>
16:30	記者会見(於:比叡山延暦寺一隅を照らす会館)
17:00	<p>レセプション(於:延暦寺会館)</p> <p>◎開会挨拶 天台宗参務総務部長 工藤秀和 里見達人師 釋允觀法師 田雲徳僧任</p> <p>◎平安雅楽</p> <p>◎乾杯</p> <p>◎祝電披露</p> <p>◎閉会挨拶 天台宗参務総務部長 工藤秀和</p>

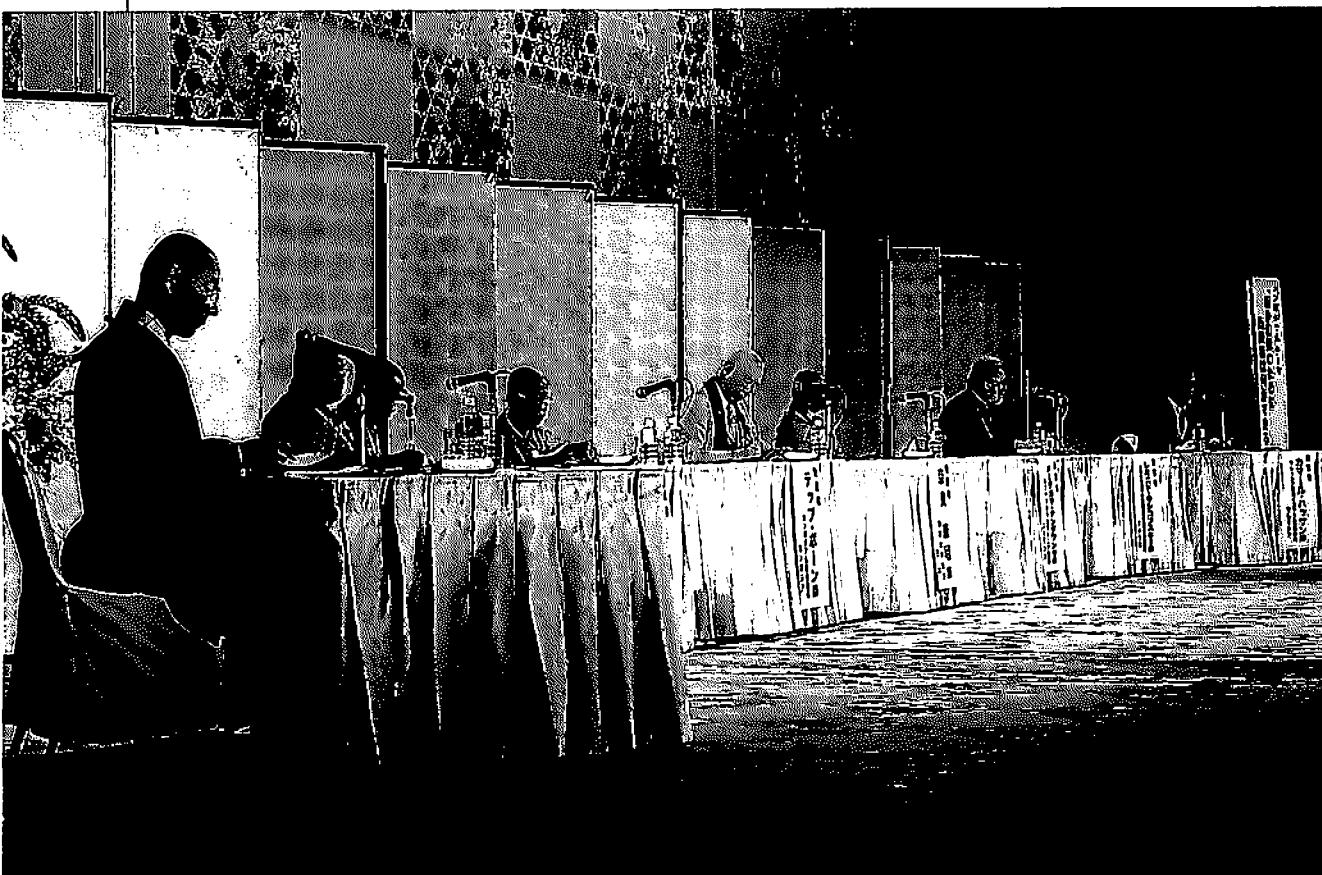
紛争和解の為に 仏教者は何ができるのか

〈パネリスト〉

- ・ギャナ・ラタナ師 愛知学院大学教授(仏教・バングラデシュ)
- ・テップ・ボーン師 カンボジア仏教会会長(仏教・カンボジア)
- ・奈良康明師 駒澤大学総長(仏教・日本)
- ・メーダガマ・ナンダワンサ師 ルフナマタラ大学シニア講師(仏教・スリランカ)
- ・レオニド・キシコフスキー師 世界宗教者平和会議国際委員会実務副議長(キリスト教・アメリカ)
- ・カマール・ハッサン氏 マレーシア国際イスラーム大学学長(イスラム・マレーシア)

〈コーディネーター〉

- ・杉谷義純 天台宗国際平和宗教協力協会顧問





杉谷 本日六名のパネリストの皆さまに参集いただき、まず仏教の側から「提言いただき、それについてキリスト教、イスラム教の方々からお話を伺いたいと思います。

本日のテーマは「平和の架け橋を求めて アジア 佛教者との対話」という大きなタイトルですが、紛争解決のために仏教者は何ができるかということでお話し合いたいと存じます。

九・一 同時多発テロが発生し、その背景について色々なことが語られていますが、同時にアフガン、イラク等で戦争が行われ、更にはスペイン・マドリードの列車テロ、ロンドンでも悲惨なテロの惨事がありました。世界は、一見混沌としているかのように見えますが、その中で十五周年の比叡山宗教サミットを開かせて頂いた時、イスラム教の代表の方から

ら「アジアの仏教徒が、是非とも世界で衝突が起つている時に平和の架け橋として働いて欲しい」という提言を頂戴しました。これはアジア、日本で開かれた会議であつたためにそのような提言を頂いたのではないかと思いますが、そのお言葉を真摯に受け止めアジアの佛教者を中心として、具体的にどんなことができるかを模索する、それがキリスト教、イスラム教の方々の佛教徒を中心として、具体的にお招きしております。何回も宗教対話の経験を積まれた先生方にお集まり頂いたので、率直な意見の交換ができるれば有り難いと存じております。

まず、それぞれの方から、紛争和解について基本的な提言を頂戴した後、更に具体的の方策をお話し頂ければ、と存じます。まず、バングラデシュのギャナ・ラタナ師よりお願ひします。

争いの解決に仏教徒は何ができるのか？

愛知学院大学教授 ギヤナ・ラタナ師

ブッダに帰依を表し、彼の教えであるダルマに従つて生活し、彼の教えを護持する集団であるサンガを尊敬する人々を我々は佛教徒と呼びます。要約して言えば、ブッダの教えとは、戒律(sila)、禪定(samAdhi)と智慧(pajjan)に含まれる四諦、八正道、縁起、業と再生です。佛教には論争を解決する三つの方法があります。



四諦(araya-sacca)

1 苦(dukkha)

四苦とは生老病死
八苦には愛別離苦・怨憎会苦・
求不得苦・五蘊成苦

佛教の教えでは、佛教徒のために論じられているだけに留まらず、世界中の人々に賞賛された二種類のライフスタイルがあります。一つは從来からあるありふれた生活で、そしてもう一つは、究極的にそのありふれた生活を超越することです。ブッダはこの両方の生活を受け入れることを説きました。我々仏教徒またはすべての人間は、議論することなく、日常の中に起こる争いを静めるためにも提示されたであろう以下の方法に学ぶことが出来るのです。

八正道(arivya aTThaGgika magga)

2集(taNha)	新しい身体に生まれたいという 渴愛官能的渴愛存在への渴愛、 非存在への渴愛、消滅への渴愛
3滅(nirodha)	これらの欲望を完全に消すこ とです。そして、欲望の消滅は 仏教の最高の境地となります。
4八正道 (ariyaaTThaGgi ka magga)	欲望の消滅には八つの道があ ります。

右記の表によつて、我々はすべてが渴愛またはそ
の集まりによつて生じているのを見る」ことができま
す。それが争いの根源になるのです。これは仏
教徒に限られた欲望ではありません。すべての人
間は同じ欲望をもつてそれに苦しめられています。
問題はそれを解決する方法です。短くて楽な答
えは、できるだけ早くその欲望を消滅させるいふ
です。もし我々が感覚的な欲望、すなわち生存に
対する欲望や生存しないものに対する欲望などを
あきらめる」とができます、「我々は争いを解決する
」ことができます。それなしに争いを解決する」と
は、全く不可能です。それがなくともまた、私たち
は争いを静める」とができると思うかもしませ
んが、しかしそれは海の塩水を飲んで泡を癪を
うとするような、また薬を取らないで病気の広が
りを防ぐ」とするようなものでしょう。

さむに争いを静める第二番目の方法は八正道で
す。それは、すなわち戒律(道徳)(sila)、集中力
(samAdhi)と智慧(pajNA)を養うことです。

1-正見 (sammA-diTThi) 2-正思惟 (sammA- saGkappa)	一智慧(puJJA) それは苦しみの理解、苦しみの 根源の理解、それを消滅させ る方法の理解です。(正しい見 解または理解)それは感覚的 な強い欲望や悪い意思や無慈 悲さから開放された心です(正 しい考え方)(正思惟)。
3-正語 (sammA-vACA) 4-正業 (sammA-kam- manta) 5-正命 (sammA-Ajiva)	一戒律(sila) うそをつかない、人を傷つける 言葉を話さない、不快な言葉 を話さない、愚かな言葉を話さ ない(正しい言葉)(正語)。生き 物を傷つけない、盗みを行なわ ない、不倫をしない(正しい行 動)(正業)。武器の取引、人身 売買、心を毀つかせる飲み物や 毒から遠ざかる。(正しい生計 の手段)(正命)
2集中あるいは惡の誘惑 (samAdhi)	2集中あるいは惡の誘惑 (samAdhi)

6-正精進 (sammA- AvAyAma) 7-正念 (sammA-sati) 8-正覺 (sammA- samAdhi)	もし、弟子が悪、すなわちまだ 生じていない不利益をもたら す物事の起きるのを避けよう とする意志を超こせば、もし弟 子が、悪、すなわちすでに生じ てしまつた不利益を与える物 事を克服しようとする意志を 起こせば、もし彼が、まだ生じ ていない利益をもたらす物事 を生み出そうとする意志を起 こせば、もし彼がすでに生じた 利益をもたらす物事を継続さ
2集中あるいは惡の誘惑 (samAdhi)	八正道では様々な方法で、我々の心と身体を淨 化していく過程です。これは簡単なように思えま すが、大半の人は守つていません。ここから欲望が生 じ、争いが生じる原因となります。集中力を養う 瞑想によつて、自己が純粹に具現化すれば、現実を 把握する」ことが容易になります。そしてその智慧 をもつてすれば、多くの争いは解決にむかうのでは ないでしょうか。

「縁起」とは、あらゆる身体的および精神的な
現象が条件によつて生じるという教説のことです。

表II	せ、それを消失させないによつ にしようとの意志を起こせば、 しかしそれらを成長させよう とし、成熟へと発展の充分な 完成へと持ち込むこと、彼がこ のような努力を行い、自らの工 ネルギーをかき立て、自らの心 を働かせ、努力する(正しい努 力)(正精進)。 それは身体性、感覚、心と心の 対象(身・受・心・法)とに集中 することに住むことである。世 俗の欲望と深い悲しみを遠 ざけ、熱心に、明瞭に認識し覚 知すること(正しい心を覚知す ること)(正念)。 それは感覚的な対象から引き 離され、不健全な物事から引 き離れされ最初の專心(第2、 第3、第4の專心に入る(初禪 から第四禪)(正しい集中)(正 定))。
-----	---

その教えは、無我、すなわち個我が存在しない。これが教えとともに、仏陀の教説を理解し実現するための必要不可欠な条件を構成します。それは、通常、人間の「我」と呼ばれる、多重の身体的及び精神的な、存在に関する現象を示しています。

表III

Past (過去)	1.Ignorance (avijja) (無智) 2.Karma-formation (saGkhArA) (行)	Karma-Process (業のトロヤバ) (karmabhava)
Present (現在)	3.Consciousness (viJjANA)(識) 4.Corporeality and Mentality (mAmam- rUpa)(身と心) 5.Six Bases (Ayatana)(六感) 6.Impression (phasa- sa)(感) 7.Feeling (vedana) (感) 8.Craving (taNha) (欲) 9.Clinging (upAdAna)(欲) 10.Process of Becoming (bhava) (変)	Rebirth- Process(再生 Gトロヤバ) (upapatti- bhava) 5 results: 3-7
Future (未来)	11.Rebirth (jAti)(生) 12.Old Age and Death (jarA- marana) (死)	Rebirth- Process(再生 Gトロヤバ) (upapatti- bhava) 5 results: 3-7

cakkavattisuttaでは、犯罪や社会悪が起る原因として以下のことを挙げています。統治者や裕福な人は、富を貧しいものに分け与えようとはしません。窃盗が多く、武器の使用が頻繁で、殺人や強盗、詐欺、誹謗中傷、性犯罪、年配や両親への悪口、老人への心遣いの欠如が、「この世界をダメにしてしまいます。

現代では、本当に起らせる社会問題に対しても、よく原因を究明していませんが、それは、見ていて逆に大変興味を持ちます。間に合わせの考え方でお茶を濁すつもりでいるようです。麻薬中毒患者や非行者のためのカウンセリングを確立するように、皆様は、「お早め」の消費社会やマスメディアの問題に取り組まなければなりません。仏教の原点にある四諦や八正道という、かけがえのない先例をもつて、知的で効果的な社会の分析と、改革の一翼を担う可能性を、仏教は十分に秘めているのではないか？

杉谷 大変簡潔に、仏教の基本原理である四諦、五戒、緣起について説明され、これらが平和へのキーとなるのであらうところ提言でした。

統じて、チップ・ボーン師にお願いします。

長い歴史を誇るこの美しい比叡山で「平和の架け橋を求めて アジア仏教徒者との対話集会」と題されました比叡山宗教サミット十八周年世界平和祈りの集いに参加出来ました」とを、心より光栄と存じます。カンボジアの仏教徒、僧侶及び信者になりかわりまして本サミットの成功に向けて多大



四 無量心」ソキーワード

カンボジア仏教会会長 テップ・ボーン師

の労を取って頂きました運営委員会の皆様に心から感謝申し上げます。

またこの機会にカンボジアで数々の慈善活動を展開頂いております天台宗に対しても深甚なる感謝の念をお伝えしたく存じます。天台宗のご好意により私どもの寺院の敷地内に建物を一棟建て頂きました。これは、新しい信者さんや僧侶が仏教やペーリ語を学ぶ佛教初等学校として使用することになっております。また、天台宗にはカンボジアの多くの省で植樹するための木を提供頂いた他、カンボジアの孤児たちの福祉のため、資金の提供を頂いておりますことを感謝いたします。

この集いは、大変重要な時期に開かれております。現在世界の平和や調和がテロや対立によってますます脅かされているからです。このため、今こそ私たち宗教指導者は、世界の平和と安全の維持に向けて更なる努力をなさねばなりません。私は、仏教が世界の諸問題を解決する方法を見出す上で重要な役割を果たせると確信致しますとともに、全ての宗教組織が手を携えて対立を解消し、世界の平和を強固なものにする上で仏教徒は架け橋になれると言じております。釈尊は、はつきりと戦争、暴力、そしてどのような種類のテロも否定しておられます。コリア族とサキヤ族の人達がロヒニ川の水の利用をめぐつて紛争となり、二度にわたって戦争が起ころうとした時、釈尊はこれの仲裁にあたられ、今にも始まるうとしていたこれらの戦争を回避されました。

釈尊がなされたことを見習つて、仏教の僧侶と尼僧は何世紀にもわたり世界平和の維持に大きく貢献してきました。釈尊がおられた時代以来、僧侶は行く先々で平和と非暴力についての教えを伝えました。

今日におきましても、仏教を伝える僧侶たちは、世界各地へ釈尊のお言葉を伝え、それぞの地域で安定と平和の維持を支援しています。仏教を奉ずる主要な国において仏教の僧籍にある人たちは、男女ともに平和と調和を守り、経済の発展と倫理にかなった生活を促すことに非常に大きな役割を果たしてきました。

平和を大切にする宗教である仏教は、非暴力、忍耐、慈悲、寛容を説いています。仏教普及の歴史全体を通じて、どのような時代においても暴力や戦争を普及のための手段としたことはありません。事実、慈悲についての講話を表わした「スッタニパータ」において、釈尊は信者たちに全ての生あるものに対して、それが長いものであれ、大きなものであれ、それらの中間にあるものであれ、短いものであれ、微小なものであれ、巨大なものであれ、わけ隔てなく慈悲の心を及ぼせと説いておられます。それが仏教徒が持つべき寛容の心なのです。

この集いを通して、私たちが世界にある数々の対立を解消する方法を見出し、全ての人たちの相互理解と幸せなかでの共存を可能とする永続的な平和と調和を創ることを目指した共通の基盤を創り出すことが出来ますよう切に希望する次第でござります。

(Mudita)・幸せや繁栄を手にした人たちと、嫉妬心を持たずに、喜びをともにし、そして「捨」(Upakkha)・周囲の出来事に心を惑わされず、落ち着いた心でいる、と言つことであります。我々全てがこの釈尊のお言葉を守れば、宗教間の、社会と社会の間の、そして国と国の間の、対立、紛争、そして戦争は決して起らなくなるでしょう。また、平和、幸福、成長、そして繁栄を手にすることでしょう。

今日世界では戦争が起っています。それは、自己中心の心や憎しみといった邪しまな考えに原因があります。それに加えて、世界には、平和や人々の善意の土台そのものを蝕んでいる物質文明の進展と関連した諸問題があります。そうした問題の解決策は、釈尊の教えの中にのみ見出せます。この釈尊のみ教えを通して世界を見ますと、緊張、憎悪、そして怒りの原因となる国籍、宗教、社会の階級、そして肌の色、その他不和や不一致をもたらすものは目にとまらず、連帯と友愛をもたらすものだけが見えることになります。

この集いを通して、私たちが世界にある数々の対立を解消する方法を見出し、全ての人たちの相互理解と幸せなかでの共存を可能とする永続的な平和と調和を創ることを目指した共通の基盤を創り出すことが出来ますよう切に希望する次第でござります。

真の平和は、お互いの理解と、協力と、そして愛により可能となります。永久の平和は正直に、心を込めて眞実性を追求することと誠実に平和に

生きよと説いておられます。」これは、「慈」(Metta)・生きるもの全てをわけ隔てなく慈しみ、「悲」(Karuna)・苦難を抱え助けを求めている人たちに心からの同情を示し、助けの手を差し伸べ、「喜」

専念することを得られなければなりません。それゆえに、眞の慈悲心が心の中にあれば、自分自身をはじめ、社会、そして全世界に平和をもたらすことが出来るのです。

全ての人が幸せで、憎悪の心を離れられますよう！

「清聴ありがとうございました。」

杉谷 テップ・ボーン師は、釈尊が実際に紛争をお止めになつたという具体的な例を挙げながら、仏教で最も大事な真理のひとつである四無量心「慈・悲・喜・捨」に基づけば、お互いの共通の基盤、対話への基盤が構築されて平和がもたらされる、仏教はそういう役割を果たすべきである、その力があるという積極的な「提言」でした。

統いて、駒澤大学総長であられる奈良康明師にお願いします。

草の根対話こそが 相互理解と自己変革の道

駒澤大学総長 奈良康明師

ユネスコ憲章の前文に、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心のなかに平和の砦を築かねばならない」とある。有名な一文であると同時に名言でもある。

問題はどう実践するかであり、私たち宗教者とともに名言でもある。

「帝釈の網」という「梵網經」にみえる譬喻を取り上げたい。旧来の一般的な世界観に対して新しいパラダイムを提供するものである。

帝釈はインド神話のインドラ天で仏教に摂取され、仏法及び仏教徒の外護者となつた。この帝釈天が地球に大きな網を掛けたという。万物を覆う網で、私たち一人一人が個々の網目だという。どの網目にも宝珠が下がつているというのだが、ミラーボールと言つた方が判りよい。つまり私たちは一つの網目でありミラーボールでもある。

この譬喻は二つのことを主張する。第一は地球上のすべては否応なしに関わり合つてゐる、といふことである。一つのミラーボールの動きは周囲のミラーボールに映り、次々に伝播してすべてに影響を与えることほどさようにすべては関わり合つてゐる。第二は個と全体の関係であつて、全体があるから個がある。「これは当然である。逆に個が集まつて全体を成立させるのだが、それは「個の単なる集合」ではない。もしそうなら、個々存在は物理的に接觸しているだけで、それぞれを内的に結ぶ「関わり合い」がない。そうではなくて、各個の縦横無尽の「関わり合いの網体」が全体だというのである。

平和問題に関連して言うなら、それぞれの国や民族、宗教グループは個々人よりもなる全体であると共に、それら各グループが個として地球という全体を構成している。さまざまなレベルで、個と全体が関わり合つてゐるが、平和運動としては、出来る限り、すべてのレベルにおいて、個々の関わり合いを平和希求に向けて流れを作つていかなければならぬ。

そのためにはどのような方法があるのか。

心は知識によって方向が定められ得るが、真に納得しない。心と形は常に運動している。心があれば動作という形として現れるし、逆に心が定まつてなくとも身体を動かす動作を行うことによつて心が定まつてくる。心の納得は動作により熟してくるものである。

具体的に二つの主要な行動があり得ると思う。一つは個人であれ、グループであれ、個々の存在が皆平和を求める心を持つてゐることを形として確



奈良
康明
発言

認することである。相互に平和への希求を持ち、その実現に向かつて行動していることを知り、励まし合うことで、このサミットもそうした運動の一つである。

同時に、第二の行動として、各グループ内の種々な個人的グループが集まり、平和を話し合い、出来る範囲での具体的な運動を行つことによつて平和を求める心を養成していく。具体的な運動が心を強め、強まつた心が更に行動を支持し、それがまた心を納得させていく。それが個としてのグループを形成して、より大きな全体への運動の流れを作つていく。

いわば草の根的な地道な運動を積み上げていく必要があるのではないか。カトリックはヴァチカンの「諸宗教評議会」で一九九一年に対話の四類型を発表している。生活の対話、行動の対話、神学的意見の対話、そして宗教体験の対話である。先人たちの努力おかげで、平和とは何か、どのように達成され得るのかといった理論は、可成りに構築されたが、具体的な実践が伴つていないことが反省されるべきではないか。生活の対話と宗教的体験（靈性）の対話への地道な努力が不十分なのではないか。

それぞれの国やグループの内部に、いくつもの小さな平和を求める話し合いや行動をおこしたい。私たちは個々に各国や、宗教グループの代表としてここに集まっている。それぞれのグループで行動と靈性の対話を起こせないはずがない。それから、一つの国に住んでいる異なる宗教者の間での対話を始め

よう。その上で国際的な対話集会も可能であろう。異なる世界観を持つ宗教者がそれぞれに平和を求める対話をを行い、それが大きな流れを作つていく。こうした草の根の対話を拡げて行くことが、遠のように見えて、相互理解と自己変革を伴う対話への早道であると思う。

杉谷 この世界はお互いの相関関係で出来上がつている、ということで具体的には個々の小さなものであつても対話が行われれば、やがて大きな流れになつてゆくであろうということを」提言頂きました。

続きまして、メーダガマ・ナンダワンサ師にお願いします。

争いを解決するために 仏教徒ができること

ルフナマタラ大学・ニア講師

メーダガマ・ナンダワンサ師



メー
ル

friction, disunity, division, disagreement, faction, collision, warの」とく「争い」=dispute」という言葉の意味と関連する言葉がたくさんある。仏教は争いを様々な形に分類している。大きな分類では、人間の内なる争いと外との争いの二種類があるが、その根柢は同じである。仏教は、個人が人生の中で直面する内なる争いや対立に力点を置いており、そうした争いに、妥当かつ永続的な解決法を提示している。自分以外との争いには、個人同士の單なる喧嘩から、国と国との間の国際レベルの争い、そして戦争という極端なことまでもが含まれる。また、こうした争いの原因は、人種・社会・経済、宗教と様々である。個人間のものであれ、国際的なものであれ、争いを放置しておくと、結局は大きな不幸を招いてしまう。

dissension, opposition, disharmony, conflict,

争いを解決する過程で仏教が用いるのは「因果の法則」という独特の方法である。この因果の法則は「正典」と認められた書物の中の「Sutta・經」で述べられている主な教えの一つである。因果とは、簡潔に言えば以下の通りである。

Imasmin sati idam hoti imassuppadā idam
uppañjati

Imastmin asati idam na hoti imassa nirodhā
idam nirujjhati

(Sii.28,70 pp; M.i.262 p; M.iii.65 p; Ud. 1 p.)

「れ在るが故に、それも止む。
」れ生ずるが故に、それ生ず。
」れ無くば、それも無し。
」れ止めば、それもまた止む。

仏教では、この因果の法則は主に人間の苦しみと現象との関連で語られる。また、一般的にこの概念は、哲学的、倫理的、論理学的、認識論的、社会的問題を始めとする多くの問題についての仏教徒の議論にも見られる。全ての仏教徒が、多少の違いはあるものの、この概念の特殊性と固有性、そして、この概念を発見したのが仏教の開祖・釈迦自身であることを認めている。仏陀が因果について語る時、

彼は、大抵の事物は条件付けられて発生し、消滅すると言つてゐる。条件による制限という教義は、仏教的なものの見方を、他の主要宗

教の見方とは異なる独特なものとしていると言わされている。单一の要素が原因とはされず、多数の条件が絡み合って作用して特定の結果を生み出すとされてゐる。このことは *paticcasamuppāda* (縁起)において特に明確に示されている。

争いや対立と、この観念は、仏陀の多くの説話で取り上げられてゐる。この「*पूर्वानुसारी*」(前の視点から見る)ことができる。まず仏教は、平和で、対立や混乱のない理想的な状態について述べてゐる。この状態は、*Santipada* (静寂の道)とか *Santivarapada* (寂靜の景勝の道)と謂われる。これも、この言葉は *Nibbana* (回義語である)「れに対し、もう一つの状態では、絶え間なく対立や争いが生じてゐる。」の状態は、*Puthujjana* (つまり凡夫)に「おもといつめる」である。

仏教によると、人間の行動の動機は六つの根(い)かの発生している。それは、「*慾*」(lobha(貪欲)、*dosa*(瞋恚)、*moha*(癡)という不善で、あるいは「*無*」(alobha(無貪欲)、adosa(無瞋恚)といふ善である。争いの元は、人間の動機の中でも不善なものと完全につながつてゐる。したがつて、争いの根を真剣に辿つて行けば、争いの背後に、そうした不善の根(い)が、全てではなくとも、一つか二つは見つかるはずである。

最後に、「欲」の「出離」(Nissarana)の部分で争いの仏教的解決法が述べられている。争いの仏教的解決法では、各個人が「欲」の上記三つの側面を理解し、「欲」の追求と執着を制御する」とが大切だと述べ、これが平和的解決のために取るべき方法だと述べてゐる。

中部經典の「*Mahādukkhakkhandasutta*」は、争いとその解決に関する仏教の見解が明確に示されています。それによると、*kāma*(欲)、*rūpa*(色)、*vedanā*(受)には三つの側面がある。それらは、

assada (深味)、*upādīnava* (過患)、*upanissarana* (出離)である。

「欲」の「深味」(*assada*)は明白である。もう一つは、な樂味や幸福が五官の快楽 (*pancakāmaguna*)から生じようとも、そつしたもののは感覚上の満足にすぎない。

「欲」の「過患」(*dinava*)には、ほとんどの全ての、人と人との間の、または社会的な対立や紛争がそれに当る。この經では、「欲」への執着ゆゑに、王は王と貴族は貴族と、母は息子と、息子は母と争い、そしてその他様々な争いが生じる。このため、ついには国同士の戦争にまで発展してしまつたことが指摘されている。争い以外にも、「欲」の「過患」(*adinava*)に関連した危難が多い。

最後に、「欲」の「出離」(Nissarana)の部分で争いの仏教的解決法が述べられている。争いの仏教的解決法では、各個人が「欲」の上記三つの側面を理解し、「欲」の追求と執着を制御する」とが大切だと述べ、これが平和的解決のために取るべき方法だといふ。

杉谷 仏教の説く縁起が紛争の中にもあてはまるといつておられた。紛争の原因を除去するには欲をいかにしてコントロールするか、更に具体的な方法もお聞きしたいと存じます。これまで四人のお話を聞きました。これらの一提言を踏まえて、どのようなお考えを持たれたか、イスラム教とキリスト教の方々からお

話をうかがいます。

それでは、キリスト教からキシコフスキー師にお願いします。

キリスト教と同じように 仏教にも期待する

世界宗教者平和会議国際委員会実務副議長
レオニード・キシコフスキー師



りつある我々が、奥深いところで結ばれていることを知っています。

私に与えられたテーマは、「紛争の解決のために仏教徒に何を期待するか」であります。私たちはすべて人生という神仏を求める旅をしており、我々は同じ旅をする連れ合いなのですからのですから、宗教の違いはあれ、お互いの間でそうした問い合わせをするのは真う当で、適切なことです。互いを理解することによって私たち全ては人類に奉仕する上で力を得ることが出来るのです。

私に与えられたテーマ自体の中に平和の架け橋を求めることが含まれています。

紛争は、国と国との間の、宗教と宗教の間の、また一つの文明と他の文明の間の対立の原因であります。紛争は時として物質や権力をめぐっての闘争となります。また、時として紛争によって世界観や宗教上の考え方の根深い相違が表に現れます。紛争が人類家族への挑戦となり、人類家族と対立する情況では、私は仏教徒に対して人類家族が深く、真に結ばれるには相互の理解、相互の尊敬、そして相互奉仕することが必要だと、穏やかに知らせて欲しいと思っています。

今日の全ての社会、文化、そして国家では心の方向性の喪失、浅薄な考え方、そして自己中心的な考えが跋扈することで、人の内なる人間が脅かされたり、知られることさえないので。偉大な宗教を信仰して生きている人々は心の糧を持つことから、人生という神仏を求めての旅をたど

このような情況においては、仏教徒が自分の内なる人間と自分が生きている社会の双方を癒すことに貢献するとすれば、それは今日マスメディアや、経済構造や、政治哲学によつて作り上げられた実体ではなく、より深みのある、真正なる人間の実体に至る道を指示示すことがあります。

そして、このより深みのある、真正なる人間の実体は、心の自由及心の陶冶、苦しんでいる人たちへの奉仕、そして男女を問わずそれぞれの人が持っている尊厳を静かに見守ることによって実現されるのです。

私がそうして仏教徒に期待することは私自身が属するキリスト教に期待することと同様であるとともに、それを反映したものであります。私は、一人のキリスト教徒として、互いを敬う心でもつて、今日の人類に人間の尊厳に向けての道を示すためのキリスト教信仰と経験を求めています。さらに申し上げれば、信仰の道をたどれば、互いを愛する」とに至るのです。

キリスト教信仰では、他の偉大な宗教におけるのと同じように、人が平和の架け橋を渴望するのとは、人間の実体に限られたものではありません。常に、より偉大で深遠なる諸々の実体があることに気づいているのです。キリスト教徒にとっては、「の偉大にして深遠なる実体の中心かつ源は神であり、神は人間を自らに似せて創り給ったのです。これは、キリスト教徒にとっては、人間が互いを敬うことを怠るということは、神を敬わざ崇めないこと

と同じなのです。苦しんでいる人たちへの奉仕を「おろそかにする」とは、神への奉仕をおろそかにすることなのです。他の人たちと和解出来ないということなのです。

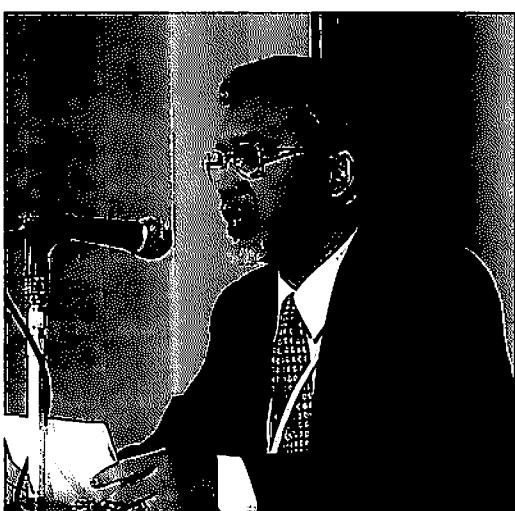
キリスト教徒が宗教上経験したことの本質及び中心をなすものはキリスト教徒の心の糧となります。これは仏教徒が心の糧とするものとは異なります。しかしそれでも、キリスト教徒、仏教徒の双方は共に平和の架け橋作りに向かって、紛争の解決に向かって、相互理解に向かって、苦しんでいる人たちへの奉仕に向かって、同じ道を進むのです。

本日京都で平和の架け橋作りとともに立ち会えますことで、全世界と全人類に希望の展望と希望を持って人類全てが同じく旅をしているということが理解されることを望みます。

杉谷　紛争は権力や物質の取り合いでなく、世界観の違いや宗教の違いによって起りうるということは過去の歴史が示しております。その中で宗教を超えての眞実を是非共通の基礎とし、その上に立つて、お互に平和の架け橋になろうではないかという、力強い呼びかけを頂戴しました。それでは、イスラム教の方からカマール・ハッサン師におねがいします。

対立解消への仏教的取組み方 イスラム教マレー人による 宗教間相互理解の試み

マレーシア国際イスラム大学学長
カマール・ハッサン氏



争いが元々の原因であった。宗教は本来、礼節をわきまえた徳のある生活を送れるよう、人間を導くものである。宗教的な導きによって、人間は自らの内に、また自分以外の人間や、自然や、至上者との間で、平穏な関係を実現できるはずである。世界の諸宗教は、この世における平安の確立と対立解消への取組み方をそれぞれもつてている。しかし残念ながら、信者達がこうした宗教の教えや理念の全てを忠実に守っているのではない。過激派や頑迷な狂信者たちが自らの目的を遂げるため、あるいは自らの不満を解消するために、暴力戦争・流血の道を選んだ場合、自らが信奉する宗教に大きな害を及ぼすことになるのである。

私の拙い仏典解釈からも、仏教が人間の対立や争いの解決に暴力を伴わない取り組み方を提示していることは明らかである。この世自体が人間の苦悩の根元であるがゆえに、人生は何らかの意味での苦しみに満ちている。したがって、人間は、対立といふものを、俗世において直面しなければならない苦難の一部と見なすことを学び、対立が生み出す悪い影響を避けるための平靜さと思慮を身につければならない。しかし、まつとうな物の考え方が出来ない人は、感情的な反応を示し、それが結局は自分自身や他者に有害な結果をもたらすのである。

因果の法則に基づく仏教の觀点からすると、一部の耐え難い、または避けがたい対立は、人間、そして人が過去の生で犯した悪い行いの結果だとさ

れている。しかし仏陀の教えに従つた生き方の実践と仏教哲学にある無常という考え方を悟ることで、救いへの道を見出せるのである。人間の内なる平和、つまり「心の平安」という仏教の概念によつて、不安を起させたり、心を塞ぎ込ませる思考や感情から、人は解き放たれる。内なる平和という強固な基礎の上にこそ、社会の平和という巨大な建造物の建築が可能になる。そのため、平和を守るということは、人々の心の中の問題なのである。

自らが暴力を否定する生活を送ることで、仏陀が弟子たちに真の平和主義者たれと教えたということは、良く知られている。対立解決のために暴力的な手段に訴える者は仏陀の真の弟子ではない。仏陀は次のように言つている。「盗人や追いはぎ達に両刃の鋸によって頭と胴とが切り放たれたとしても、心乱れてはならない。それによつて心が暗くなるのは、仏の教えを守らない者である」。^{※注1} 仏陀は弟子に次のように説いた。

愛をもつて怒りを制し、

善をもつて悪を制し、

氣前の良さでもつて吝嗇家を制し、

眞実をもつて嘘つきを制しなさい。^{※注2}

仏陀の伝記には、対立を平和的に解決する方法を示した、多くの逸話が盛り込まれている。たとえば、コリア族とサキヤ族が互いの領土の間を流れ口ヒ二川の水をめぐつて争いとなり、戦いの準備を

するという話があるが、仏陀はこの差し迫つた対立に介入し、取るに足りないことで大切な命を奪う準備をするとの恐かさを説き、戦いをやめさせた。^{※注3}

現在のスリランカで起きている民族間対立に和平、調和、和解をもたらす上で仏教が持つている可能性に関して、二〇〇二年六月に開かれた「仏教とスリランカでの対立に関するバス会議」で真剣な学問的分析と知的な討論がなされたことは、明記に値するだろう。仏教の主な宗派の文献を読めば、現代における対立の解決に資する多くの参考・指針・名案を見出せるものと思つ。デンマーク対立解決センターは、対立への主な取り組み方として次の三つ提案している。第一は、「当該の問題を、非暴力的なコミュニケーションまたは思いやりのあるコミュニケーションにより適切な討議を行つて提起し、関係者のニーズや意図を考慮することが、対立解消の最も適切な方法である」ということである。^{※注4}

対立解消の手段としての仲裁の役割は広く認められており、仲裁者になることを希望する人にとっては、その人が仏教徒であれ、非仏教徒であれ、仏教のいくつかの伝統の中で考え出された様々な仲裁の技術を知つておけば役に立つだろう。^{※注5} 「気配りのきいた仲裁」は、取り組みの効果を高める技術の一つである。仏教の考えに基づく仲裁には次のような特性がある。(1)初心、すなわち物事を予断なしにあるがままに受けとめる能力。(2)傾聴、すなわち落ち着いて注意深く人の話を聞く技術。(3)沈着または平靜、すなわち周囲のものに影響されない、落ち着いて均衡のとれた心の状態。(4)自己認識とコントロール、すなわちコミュニケーションの障壁や反感を察知する早期警戒機能。(5)根気、これは、多様な文化や政治の背景をもつた争いの当事者たちに対応する場合にとりわけ重要な徳である。^{※注6}

仏教の四聖諦という考えは、争いや対立の解決への仏教的な取り組み方の基礎である。仏教では、全ての苦の源はマイナスの感情の影響と自らの因果に起因する、人間存在が持つ無常にあると信じられている。まずこの世界観をきちんと理解することが基本である。

仏陀の教えによると、四聖諦の一つ目は苦諦、すなわち人生は苦しみに満ちているということ、また、満たされない渴望も苦であるということだ。^{※注7} 四聖諦の二つ目は集諦である。集諦によつて、人間は物質的な利益への渴望や世俗的情熱という形で現れる欲望、つまり感覚的満足への渴望が、苦の源であることを知る。聰明な仏教徒は、欲望や憎しみやその他のマイナスの感情が人間間の対立を引き立てる上で大きく作用していることを知つている。このため、人間の自我の中にあつて、そうした対立の底に横たわつて、つまり隠れている原因を、まづ見極めようとするものだ。これが、四聖諦の第二番目である滅諦につながる。対立の根本原因がひとたび見極められれば、それを取り除くことで、苦悩や苦痛や対立をなくすことができる。平和を愛

する仏教徒は、対立を誘発する感情・思考・行動を無くすか、またはこれらを相互理解や思いやりのある態度や平和的な結果を生み出すプラスのエネルギー・力に転ずることに全力を注ぐだろう。

したがって、利己的な欲求を充足することへの渴望や、自我を肥大させるような思考から脱却する」とが、対立を効果的かつ永続的に解消するために不可欠なのである。四聖諦の四番目である道諦は、苦を滅する唯一の方法が八正道のみであると説いている。^{※注8}

八正道には、(1)正見、(2)正思惟、(3)正語、(4)正業、(5)正命、(6)正精進、(7)正念、(8)正定という八つの段階がある。八正道は「苦滅道諦」として知られている。これらの道の具体的な内容は次のとおりである。

正見とは、四聖諦を明らかにして、原因・結果の道理を信じ、外見や欲望に惑わされないことを意味する。

正思惟とは、欲にふけらず、貪らず、怒らず、害う心の無いことである。

正語とは、偽りと、無駄口と、悪口と、二枚舌を離れることである。

正業とは、殺生、盜み、よこしまな愛欲を行わないことである。

正命とは、人として恥すべき生き方を避けることである。

正精進とは、正しいことに向かって怠ることなく正精進とは、正しいことに向かって怠ることなく

努力する」とである。

正念とは、正しく思慮深い心を保つことである。

正定とは、誤った目的を持たず、智慧を明らかにするために、心を正しく静めて心の統一をする」とである。^{※注9}

対立や争いといった問題に取り組むには、「その

基底にある二つの苦しい状態、すなはち無明と欲望」に対処しなければならない。「この無明と欲望をも

とにして、これらから貪り、怒り、愚かさ、誤解、恨み、嫉妬、へつらい、たぶらかし、傲慢、侮り、自己陶酔、

わがままが生まれ、形を現してくるのだ」。^{※注10}

貪りと怒りと愚かさは「世の三つの火」と言わ

れている。「人の貪りも、愛欲も、恐れも、怒りも、難儀も、不幸も、愚かさからくる。愚かさは實に三

つの火の中の最たるものである」。^{※注11} こうした

火に冒された心の状態が、人間によこしまな行動をとらせ、それがひいては何らかの対立を生み出す

のである。この世には三種の人達がある。一番目の種の人は、岩に刻んだ文字のような人である。しばしば腹を立てて、その怒りを長く続け、怒りが、刻

み込んだ文字のように消えることがない。二番目の種の人は、砂に書いた文字のような人である。腹

を立てるのは同様であるが、その怒りが、砂に書いた文字のように、速やかに消え去るのである。三番目の種の人は、流れの水に書いた文字のような人である。水の上に文字を書いても、流れ形になら

ないように、他人の悪口や不快なことばを聞いても、少しも心に跡を留めることもなく、温厚な気

が満ちている。^{※注12} 対立は通常、一番目の種の人達の間で起きる。世俗的な執着や自己中心的な思

考やよこしまな欲望を無くすのは簡単なことはない。世俗の快樂に強欲で、感覺的な事物への渴望がある限り、心の内と外の両方の平和への道は険しいものであろう。しかし、次のようにも説かれて

いる。

「種はまがれてから、農夫の辛苦と、季節の変化を受けて芽が生じ、ようやく最後に実を結ぶ。さとりを求める人は、それと同じように、忍耐強く、根気良く、悟りの土を耕さなければならぬ」。

悟りを求める人は、「四正勤」を心に留めておかねばならない。これは、「これから起こうとする惡は、起らない先に防ぐ。すでに起こうた惡は、断ち切る。これから起こうとする善は、起るようにもしむける。すでに起こうた善は、いよいよ大きくなるように育てる」。^{※注13}

最後に、暴力的な対立を起しがちな人々は、仮陀の次の言葉が示す叡知について考えをめぐらすべきである。

「自らに克つは、戦において数千人に勝つことよ

りも大きな勝利である】※注15

ます。しかし、仏教徒による災害というのは起きていません。

杉谷 仏教の原理を研究されて三毒、貪欲、瞋恚が紛争の基になると指摘でした。非暴力を原理とする仏教が架け橋になって欲しいとの提言です。これまで諸先生からご提言を頂きました。

どのようにお考えかをお聞きします。ハッサン師のお話に、色々な紛争地域の調停についてのことがありました。そこでスリランカのナンダワンサ師に、タミル族とシンハラ族の紛争について、仏教も大きな役割を果たしていると聞いています。どうお考えになり、どのような手立てが可能であるかお伺いします。

ナ・ンダ・ワ・ン・サ　スリランカは民族の争いを二十年経験してきました。沈静化の方向にはありますけれど、残念なことに今も続いています。紛争の経緯よりも、仏教徒がどのような方法をとって解決しようしてきたかをお話します。スリランカでは大半が仏教徒です。タミールはスリランカの北部に主に住んでいて、スリランカの島全体にいます。過去には共存共榮をしてきたのですが、極端な考え方方に走る人々が出てきました。これまで、仏教徒は寛容な心で対処してきました。いろいろな仲介の役割を担つてきましたと思います。私としては休戦に至ったのに、まだまだ殺戮が続いていることを残念に思いました。沈静化の方向にはありますけれど、残念なことに今も続いています。紛争の経緯よりも、仏教徒がどのような方法をとって解決しようしてきたかをお話します。スリランカでは大半が仏教徒です。タミールはスリランカの北部に主に住んでいて、スリランカの島全体にいます。過去には共存共榮をしてきたのですが、極端な考え方方に走る人々が出てきました。これまで、仏教徒は寛容な心で対処してきました。いろいろな仲介の役割を担つてきましたと思います。私としては休戦に至ったのに、まだまだ殺戮が続いていることを残念に思いました。

政府はもちろん、一の争いを対話を通じて解決しようと、最善の努力をしていますが、うまくいかない場合が多いのです。話し合いをしてみたいという人々がいるからです。彼等は、常に暴力的な方法に訴える人です。私たちが、仏教徒として努力していることは、そうした人々を対話のテーブルに付かせようとしていることです。しかし、彼等はアウトローです。社会の普通の人々にはダーマ（自然の法）は守られていますが、そんなものは必要ないという人々もいるのです。そこでは、ダーマよりも法律を適用しなくてはなりません。

寛容の心と対話を通して行うのが、最も適切な仏教的問題解決ではないかと思います。また国際的な支援が必要ですが、このような支援は非常に注意深く与えられるべきです。支援を仰ぐのも注意しなくてはなりません。外国の色々な非政府組織などで、支援の本当の意図が隠されている場合があるからです。人々を融合させるのではなく、分断させるように動くときがあるからです。ですから非常に注意深く見なければなりません。

スリランカの政府は、民族紛争を対話を通じて解決しようとしています。我々仏教僧侶は、政府を支持しています。中には非常に強くメッセージを発信している僧侶もいます。タミールに対してではありません。スリランカの僧侶はタミールと対立しているという人がいますが、それは全くの間違いでいません。しかし、仏教徒による災害というのは起きていません。

そういう人は南ダメーパーリイから来ているということが分りました。彼等は我々に反対しているのではなくて、スリランカの言葉、文化を吸収しているということです。今、共に生きていく時代になつてゐるのに、そのような誤解があるのです。そこには、政治力が働いてゐることがあります。他人をコントロールしたいという力が働くのです。こうした不幸な問題がまだスリランカには存在しています。

「」のような戦争というのは、平和的な対話を通じて、お互を尊敬し合うということのみによって解決することが出来ると思います。

世界宗教者平和会議(WCRP)で諸宗教の対話をお進しているキシコフキーさんにお尋ねします。」)のように対話の席につかない人を、いかに対話の席に導くか、経験をふまえてのお話をお願ひしたいと思います。

キシコラスキー 具体的な例で申し上げます。ボスニアの戦争は、宗教的因素が原因であることははつきりしていました。クロアチア人はカトリックです。セルビア人はギリシャ正教です。ボスニア人はだいたいがイスラム教でした。共産主義の時代がユーロスマニアにはありました。その時は宗教的な意識、知識や実践は少なかつたと思います。

しかし住民は、それぞれの宗教にアイデンティティ

イを求めていたということは興味深いことです。

WCRPは、紛争の最初からそれぞれの宗教団体とコンタクトをとつてきました。その時代には、どの宗教団体も対話の準備ができていませんでした。しかし、個人と個人には話し合う努力をしてきました。その中で対話を始める架け橋が見えてきました。対話を続けてゆこうとする動きが出てきたのです。

しかし、まだお互いの間に深い不信がありました。それぞれの宗教は、各リーダー達に率いられておりました。原理原則としては認めて、公には認めていなかったのです。しかし、遂にカトリックとキリスト教とが協力してイスラム教に働きかけるという話し合いが成立したことを、ペンドレーWCRP総長と私は見ました。対話の始まるきっかけとなるのは個人の力であるということを申したかったのです。

宗教界のリーダーに話し合うように、我々は持ていかなくてはなりません。象徴的な声明を発表するより重要なのは、個人的な努力です。その努力が対話などしなくてはならない人々を対話の席に着かせることができます。ここにおられる立正佼成会の庭野会長も、ただ単に会員を率いて支援しただけではなく、現地を自ら訪れました。こうしたことがあって、現地の人々も世界の人々も対話の道を探そうということになりました。

杉谷 ボスニアでの体験から、不信はありながらも個人の力から対話の場をまず作ることが大事だということです。

庭野会長の活動が紹介されましたが、もうひとアで平和のために貢献されました。」紹介します。奈良先生のご提言に「すべては相関関係にある」との指摘がありました。小さな積み重ねが大事であるということに通じると思います。奈良先生は生活の対話に対して靈性の対話が足らないと指摘されました。そのことについてお話を下さい。

奈良 対話なんかしたくないと言っていた時代、それをWCRPや比叡山宗教サミットなどの色々なグループのご努力があつて、やつと皆が話し合える時期が来たと思っています。宗教対話は様々な形で行われているが、思うようには進まないというひとつ反省は、いまだに宗教対話は教理論争、あるいは教理の優劣を争うレベルであることが少なくない」とでしょう。

かつてキリスト教と仏教とは宗教対話なんてありませんでした。あつたのは宗教対論です。違った点を争つて、どっちがいいと、また韓国においてはそういう論争が行われているやに聞きます。教理が違うのは当たり前で、それを前提に相互理解を図つていかなくてはなりません。先程来、仏教の精神によって平和を実現すべきであるとの提言を頂いています。それはそうですが、一方で同じような精神が他の宗教にもあるはずです。それを教理ではなく、仏教の普遍的な教えの底にある精神を踏まえつつ、他宗教との方々との対話を心がけてゆかなければなりません。

具体的にいうなら、仏教徒はよき仏教徒になるべきだし、クリスチヤンはよきクリスチヤンの信仰にて生きるべきで、イスラム教はよきイスラム教徒としての心情を披露していくたく。その中でどこが違うかという、どちらがいか悪いかではなく、同じ宗教者として、あなたもそう考えるか、私もそうだとそれぞの宗教の根底において頷きあうことが出でくるのではないかでしょうか。

靈性の交流とは、同じ宗教者としての頷きあいであり、それは相互理解に繋がり、相手への評価は自己変革に繋がります。私は宗教対話とは、相互理解と自己変革と受け止めています。この靈性の対話は比較的限られた人が、限られた場で行つてきました。現実、アジアでも中東でも様々な所で紛争が起つています。靈性の交流と共に、何とか平和をもたらそと祈りの集会を持ち、祈りとは一時的なものではなく、その精神に従つて生きてゆくということであろうし、そこで方策を話し合つたり、なかなか効果的なものは出てこなくても、平和を求める心の促しに応じて色々やつて行く。そうした行動が、小さな草の根から始めて日本の各宗派が平和を求め抜がり、大きなうねりになる努力をしなくてはならない。そうしたことが宗教対話を見定する人をも巻き込んでゆくのです。

杉谷 対話の継続というか、限られた場であつてもそれを続けてゆくことを説かれました。ギャナ・ラタナ師はどう考えられますか

ギャナ・ラタナ 信仰と尊敬の念を持つことで一堂

に集うことが出来ると思います。違う宗教者が同じ教義を信じることは不可能です。他の信仰を尊敬するということです。信仰と叡智を持つことで、同じ方向に進むことができると思います。どの宗教にも狂信的な人はいます。信仰は叡智をもつて受け入れることが大事です。信仰だけだと冬の霧のように目の前が見えなくなり危険です。信仰と叡智によってバランスをとることが必要です。

杉谷 カンボジアの紛争においては、仏教者のみならが多く犠牲者が出来ました。その苛酷な状況を乗り越えて、平和のために勵かれてる「トップ・ボーン師」にお同いします。

トップ・ボーン カンボジアでは、仏教が信じられています。私達は仏陀の教えに従っています。その教えとは團結して困難に立ち向かうことです。違いはあっても、一致して同じ問題に立ち向かうことが重要です。その時には仏教の教えに基づき、お互いに慈悲の心を持つのです。そして、私達が学んだことを他人たちにも分け与えるのです。私達の心をもう一度耕し、非暴力の原理をもう一度思い出します。その教えに基づいて、國が豊かになるよう復興していくからなりません。これが、私達がカンボジアで行ってきたことです。

杉谷 簡潔なお言葉に、じみ出る「苦勞が感じられました、カンボジアの虐殺は悲惨ですが、同じようにテロで多くの人々が犠牲になっています。ハッサン師に聞きます。「ジハード」という言葉は、信仰に徹するあまり戦争を起こすという意味に

理解している人々もいます。そのような状況で対話は可能でしょうか。

ハッサン ジハードという言葉は誤解されています。イスラム教徒でさえ誤解しています。聖戦（ジハード）は元々アラビア語で「努力する」という意味です。エネルギーの最高の状態を得るために努力をすべきであるとそれが聖戦（ジハード）の意味で争うということではありません。

キタールというアラビア語があります。これが「戦う」という言葉です。ジハードは歴史的に、暴力に対して立ち向かう努力をするという使われ方をしたことはあります。平和を達成するという文脈で使われて来たのです。

ジハードが戦いと関連づけられてきたのは、イスラエルとパレスチナの対立ゆえにです。一九四七年、パレスチナの分割に端を発しているのです。土地を奪われるということで、物理的に戦うという意味に解釈したわけです。コーアンでは、他者のために努力をすると示されています。ジハードは非常に広い意味で説かれています。

どこの宗教にも狂信者はいます。彼等はジハード

を戦争の意味に使います。時にメディアによって「聖戦」と伝えられます。これも二十世紀の悲劇と考えます。西欧諸国メディアがそう伝えていました。もう一世紀近くその状態です。世界を白か黒かで見るべきではありません。私たちの世界は色々な色があります。メディアが取り上げると自分が黒になってしまいます。ある国は悪の枢軸国と

いわれたりします。間違った考え方を、力ある国がプレゼンしてしまいます。だからこそ、対話は続くなってしまいません。西欧諸国の中にも、イスラムの中に誤解があります。これを正すために対話を必要なのです。

イスラム教徒はイスラム教以外の人々に働きかけなくてはなりません。そのことで平和が達成されると思います。教義の違いではなく、共通の所をみてゆくのです。自分以外の宗教についてもと知るというのが第一歩です。客観的に見て、過去にとらわれず、先入観にとらわれずです。メディアは自分たちが描きたいように宗教を描きます。メディアのいいなりになるのではなく、宗教とメディア、宗教と違う世界との対話も必要だと思います。

イスラムはもっと対話に参加すべきです。イスラムの教会と仏教寺院がもっと近い関係を結べば、アラブ諸国と日本ももっと近くなるでしょう。現在の中東の状況にも、是非仏教は手をさしのべたいだときたいと思います。

杉谷 仏教から具体的な提言があれば、発言して頂きたいと思います。

奈良 歴史的に見るなら、個人の生き方を中核に持つ信仰にどうも重きが置かれて、目が社会の問題にあまり向いていなかつたのではないか。あるいはいのではないか。私の中にその反省があります。もう少し、仏教の世界に生きている者として、周りに起っている様々な悲惨な状況、困難な状況を自分なりに心の痛みとして受け止め、何か行動し

なくてはならないという関心を、もつと持つ必要があるのではないでしようか。

私がショックを受けたのは、カトリックのマザー・テレサの言葉です。

「愛の反対は憎しみではない。無関心だ」

対概念は憎悪でしょが彼女は「無関心」だというのです。現実社会での宗教者としての生き方を考えると、「ことになると、人の悩みを平気で見過している無関心さが問題です。平和を考えるとき、仏教徒として周りに起つる様々な」とにもっと関心を持ち、心の痛みとして受け止める姿勢があつていい。それがあつて、草の根的なものが意味を持つのです。

ギャナ・ラタナ 人間として、心、身体、言葉の三つを持つ。平和であれ、紛争であれ、この三つで対処できます。日常生活でそれを御していけるなら、平和はやがてきます。平和は私の家族の中に実現できるでしょう。平和は世界中で実現できるでしょう。心の平和を持ち、戒律を実践しての三つをひとつロールするなら、平和は我々の心の中に永遠にやってきます。

杉谷 仏教が平和の架け橋になる原理的なものは充分にあるということでした。仏教徒がもつと世界に目を向け、特に中東の紛争についても役割を果たすべきではないか、そういう提言もありました。

宗教対話は、人類の歴史から見れば非常に新し

い行動であり、ようやく世界的にも諸宗教の対話が認知されきました。十八年前に比叡山宗教サミットを行つたときには、異なる宗教が同じ空間を共有して祈るところは「画期的」というか、奇異な目で見られた時代でした。色々な紛争に対しても世界の宗教者が道を開くところもありました。

十五周年の比叡山メッセージには「目に見えない敵に對し、恐怖のあまり全く根拠もない新しい敵を作り上げ、それに暴力をもつて対処しようとする暴挙は行つてはならない」とあります。対話がなければ、勝手に自分の心の中に敵を作り上げ、更に恐怖心と結び、それが信仰と結ばざるなるか、そこに智慧行きが必要です。道遠くして日は暮れる、といふことにならぬよう努めを継げたいと思います。

注① 2000年8月30日、国連で開かれた「世界宗教指導者の会議」「アム世界平和サミット」における講演「対立解消に関する仏教の見方」より。

注② 前掲書

注③ 前掲書

注④ www.timesoftibet.com/Buddhism and Conflict Resolution

注⑤ 「Resolution」(紛争解決に関する四半世紀)の最新ニュース(2003年3月、米国バーミングhamにて発行)

注⑥ 前掲書p.1.

注⑦ The Teaching of buddha(1966年、東京、伝教伝道協会p.74.)

注⑧ 前掲書p.76.

注⑨ 前掲書p.328-330.

注⑩ 前掲書p.162.

注⑪ 前掲書p.172.

注⑫ 前掲書p.176.

注⑬ 前掲書p.326.

注⑭ 前掲書p.332.

注⑮ 前掲書p.370.

すぐには結論は出ませんが、忌憚のない意見が交わされました。対話を深められたと思ひます。さらに皆さまの持ち場、生きる場で、家族、友人、神仏との対話をされ、その輪を広げていただきたいと念願します。

平和の祈り式典

八月四日(木)十四時四十五分～十六時三十分
比叡山延暦寺一廟を照らす会館前広場

(敬称略)

開式の辞

西郊良光(天台宗宗務総長)

祈りの言葉

◎サダナンタ師(全印度僧伽協会監督)

◎釋一誠法師(中国佛教協会会长)

◎釋淨心法師(世界佛教華僧会会長)

◎金法長僧任(韓國佛教宗團協議会会长)

◎カマール・ハッサン氏(マレーシア国際イスラーム大学学長)

◎ショード・キシコフスキー師(世界宗教者平和會議国際委員会実務副議長)



比叡山宗教サミット18周年 世界平和祈りの集い

平和の架け橋を求めて アジア仏教者との対話集会

平和祈願文

渡邊惠進(天台座主)

平和の鐘

平和の黙祷

ユニセフ募金寄託式

平和の合い言葉

比叡山メッセージ発表

小林隆彰(天台宗国際平和宗教者協力協会顧問)

閉会の辞

森定慈芳(比叡山延暦寺執行)



文願祈和平

謹み敬うて、宇宙に遍満し、慈悲遍まねき諸仏善神に乞い願い奉ります。過ぐる一九八七年八月、イタリア・アッシジにおける『平和の祈り』を継承して比叡山の地に世界の宗教者が集い、「比叡山宗教サミット平和の祈り」が行われ、世界の恒久平和実現をお祈りいたしました。それより数えて、本年は十八周年となります。「この間、私たちは変わる」とのない決意と熱意をもつて宗教間対話を続け、一緒に祈り続けてまいりました。

しかしながら、現実の世界は、アフガン・イラク、パレスチナなどの戦渦は未だ治まらず、地球上の各地で大小の紛争に関わる報道の途切れるところは、残念ながらありません。死亡や負傷、そして逃げ惑い、飢えや病いに苦しむ人々のニュースにも、その多さの故に無感動にやり過ごす風潮すら生じかねないと懸念いたしております。

本年は、「平和の架け橋を求めて」と題したアジア仏教者との対話集会が開かれ、参加された各宗教代表により平和の回復・創造を目指した有意義な対話がなされました。この成果が早急に実現に向かうこととを念願せざにはおられません。

また、今春にはローマ法王ヨハネ・パウロⅡ世が神に召されました。山田恵諦第二百五十三世天台座主など世界の恒久平和実現に向けて宗教間対話を実現し、その発展に大きな足跡を残された方々が相次いで世を去られました。後を受けた私どもの責務は、一層重大なものとなつたことを自覚せねばなりません。

本日、この祈りの集いに内外より「参集の皆様と一緒に、傷つき苦しむ人々と、その肉体的・精神的な痛みを共に分かち合うとの思いをもつて、平和と安寧の実現をより強く、より切実に求めて祈りを捧げたいと存じます。

偉大なる神よ、そして佛よ、われ等の切にして真心こめた、この祈りを哀愍し納受したまえ。

平成十七年八月四日

天台座主 渡邊 恵進

謹んで祈り奉る。

比叡山宗教サミット18周年

平和の架け橋を求めて アジア仏教者との対話集会

発行日＝平成17年12月1日

発行＝天台宗務厅

〒520-0113

滋賀県大津市坂本4-6-2

TEL (077) 579-0022

FAX (077) 579-2516

制作・編集＝天台宗務厅総務部国際課・出版室

印刷＝ヨシダ印刷株式会社



比叡山宗教サミット18周年 世界平和祈りの集い
「平和の架け橋を求めて アジア仏教者との対話集会」

The Interreligious Gathering of Prayer for World Peace
Searching for a Bridge of Peace With Asian Buddhist Dialogue

〒520-0113 大津市坂本4丁目6番地2号 天台宗務府内
TEL (077) 579-0022 FAX (077) 579-2516

TENDAI SHUMUCHO
4-6-2 Sakamoto, Otsu-city, Shiga-pref., JAPAN 520-0113
Phone (077) 579-0022 Fax (077) 579-2516